東南アジアにおけるジャータカと パンニャーサ・ジャータカ

ピーター・スキリング
（訳 畝部俊也）

「ジャータカが極度に人気があるのは、もっとも有名なジャータカを全体的にまたは別個に保存する写本がひじょうに多いばかりか、それらがしばしば仏教美術に表現されていることによって明らかである。」[1]
ジャン・フィリオザ

序：ジャータカ文献についての考察

ジャータカは仏教文献の中でも、最も古い部門の一つである。このジャンルは仏教に特有のものである。[2] すなわち、これは、ジャイナ教やバラモン教の文献には見られないのである。[3] テーラヴァーダ仏教のクッダカ・ニカーヤに含まれる、「ジャータカ」という名前の下に見られる偈文の集成や、サンスクリットの『ジャータカ・マーラー』の集成のような、はっきりとした形のジャータカのテキストが存在しているのではあるが、それを越えてジャータカは、声聞乗（Śrāvakayāna）であろうと大乗（Mahāyāna）であろうと仏教文献のすべてに広く行き渡っている。しかもそれは、過去の生涯の物語が、経典（声聞乗のものであれ大乗のものであれ）においても、律においても語られ、あるいは言及されるという意味で、形式の面で行き渡っており、そこにおいて人が過去の仏と未来の仏とに結びつけられるような、多くの生涯に渡る経歴が、仏教の修行の前提にして必須の条件になっているという意味で、イデオロギーの面でも行き渡っているのである。

仏教の主潮においては、釈尊がそこにおいて波羅蜜の行を全うした過去の生涯というものが、当然のこととして認められている。[4] その過去世についての記述、すなわち、ジャータカは、釈尊のボーディサッタとしての経歴の不可欠の要素である。同じように、たとえば、『ジャータカ・ニダーナ』や『ラリタヴィ

スタラ』の13章におけるように、ジャータカは仏伝とは不可分なものとなっている。[5]

ジャータカの物語、あるいはジャータカに対する言及は、多くの大乗経典にも見ることができる。『賢劫経』(Bhadrakalpikasūtra)は、その波羅蜜の解説において多くのジャータカに言及し、さらにジャータカは、『金光明経』(Suvarṇaprabhāsa)という初期の重要な大乗経典の不可欠な部分である。50のジャータカが、『護国尊者所問経』(Rāṣṭrapālaparipṛcchā)[6]の偈において要約されている。大品系般若経典には、ボーディサッタの動物としての生涯について、般若経思想の観点からの興味深い論考が含まれている。[7]声聞乗の部派のテキストからの例は、この後に取り上げられるであろう。

漢訳でしか残っていない、龍樹に帰せられる『十住毘婆娑論』は、念想すべき偉大な菩薩たちのリストを挙げている。(弥勒菩薩に先立つ)最初の21は、ジャータカからのボーディサッタ(菩薩)の名前であって、それはすなわち、釈尊の過去の生涯なのである。[8]

同じテキストの中の偈文は次のようにジャータカに言及している。

> 本仏道を求むる時、諸の奇妙の事を行ずること、諸経の所説の如し。頭面に稽首して礼す。[9]

『摂大乗論』において無着は、菩薩が「種々なる諸の本生の事を現ず」[10]ことを、菩薩の甚深なる倫理の一面として引用している。ジャータカは『仁王護国般若波羅蜜多経』のような「偽経」である大乗経典においても言及されている。[11]要するに、ジャータカを見つけるよりも、見つけない方が難しいぐらいなのである。

ジャータカは、インドにおける仏教の、アショーカ王後の最も初期の痕跡、すなわち、バールフットやサーンチーやブッダガヤやアマラーヴァティーなどの遺跡の石刻レリーフの頃から、ポピュラーであった。[12]アジャンタ第10窟の、現存するもっとも古い仏教絵画は、二つのジャータカ(六牙象とシュヤーマ)を、ブッダの生涯及びウダヤナ王の伝説とともに描いたものである。[13]ジャータカは、アジャンタにおいては続く数世紀の間描き続けられたし、また、もはや諸行無常の法則に屈服してしまっている他の遺跡においても、間違いなくそうであったであろう。

ネパールにおける最も早い時期の碑文である、「おそらく５世紀前半の年代のものの断片」であるチャーバヒラ碑文は、ある女性の「キンナリー・ジャータカの絵によって装飾された」チャイティヤの寄進を記録している。[14]

スリランカの年代記、『マハーヴァンサ』と『トゥーパバンサ』によれば、紀元前１世紀、ドゥッタガーマニー王がアヌラーダプラに大塔を建てたとき、彼は、舎利室を、ブッダの生涯だけでなく、「詳しく」(vitthārena)描かれたヴェッサンタラ・ジャータカを含むいくつかのジャータカの情景によって飾らせたとされる。[15]その後、５世紀初頭、アヌラーダプラの仏歯祭の折には、王は、行列のコースに「道の両辺を夾んで菩薩の五百身已来の種々の変現を作らせた」と法顕が記録している。[16]

ジャータカは仏教が伝わったすべての場所に広まった。あるいは、ジャータカは「移住した」といってもいいかもしれない。それらは、ガンダーラやその北西部、[17]さらにはネパールの至る所が過去の生涯やボーディサッタの行為の遺跡として巡礼地や霊場になったり、地方文化の衣装を身につけたジャータカ壁画が描かれるという形で、急速に土着化されたのであるから。敦煌など「絹の道」に沿った石窟寺院には、特に早い時代から、ジャータカ壁画がたくさんある。未だ同定されていないものを含む、およそ百のジャータカが、ジャワのボロブドゥールの大ストゥーパの下段のレリーフに描かれており、それはおよそ９世紀のものと考えられている。

もともとプラークリット諸語や「仏教梵語」やサンスクリット語で伝えられた諸々のジャータカは、コータン語、トカラ語、ウイグル語、ソグド語といった中央アジアの諸言語に翻訳された。[18]最初に漢訳された文献のうちのいくつかは、ジャータカであった。初期の翻訳者の一人は、交阯(現代ヴェトナムのハノイの地域)で生まれたソグド系人の康僧会で、10歳で出家したといわれている。247年に彼は南京にいき、そこでテキストを中国語に翻訳した。その中には、『六度集経』があり、[19]それについて塚本善隆は、「『六度集経』が康僧会の訳行の主たるものであった」と述べ、さらに、次のように続けている。

> この経は、仏教説話文学として、(中略) 特に注目さるべきものである。この経は釈迦牟尼が悉多太子に生まれて成仏した生涯よりもはるかに久しい以前に、王にも太子にも富人にも貧人にも、あるいはまた象や鹿などにも

生まれて、（中略）六波羅蜜（ṣaṭ-pāramitā）の行（中略）をつみかさねてきた前生物語である。[20]

シャバンが、漢文からヨーロッパの言語に翻訳されたジャータカ集として古典となっている彼の記念碑的な『五百ジャータカおよび漢訳三蔵からの説話選』に所収の88話を抜き出したのは、まさにこの書からであった。[21] もう一つの初期の漢訳としては『撰集百縁経』というアヴァダーナ（ジャータカと関連するジャンル）の選集があり、それはいくつかのジャータカを含んでいる。その翻訳は、支謙によって223年から253年の間になされたもので、ずっと後代の写本によるサンスクリット語テキストと、おおむね一致している。[22] 鳩摩羅什によって翻訳された般若経の注釈書である『大智度論』は、ジャータカについての言及やジャータカ物語を豊富に含んでいる。この書は、東アジアの仏教徒にとっての、源泉資料であったし、現在もそうである。

チベットではアールヤ・シューラの『ジャータカ・マーラー』とその注釈、あるいはハリバッタの同名の作品のような、いくつかの古典期のジャータカ作品が翻訳された。[23] 数多くのジャータカが、律、『賢愚経』（mDo mdzaṅs blun）、アヴァダーナ集や大乗経典などの、チベット語に翻訳された他の作品に埋め込まれている。[24] このジャンルがチベット人の想像力を捉えていたことは、カルマランジュンの『百ジャータカ』[25]、シェチェンギュメー・ペマナムギャルの『経蔵に基づく前生話集』[26]、ペマチューペルによる『アヴァダーナ・カルパラター』の要約[27]といった簡約版がチベット人によって著されていることから見て取ることができるであろう。ジャータカはゲルク派の前身となったカダム派では、6つの基本テキストの中の一つであった。

7世紀に義浄はジャータカ劇について「人皆舞詠して、五天に遍ねし」と記している。[※] ジャータカ演劇の文化は、仏教とともに（あるいは当然ながら仏教に含まれて）広まった。たとえば、チベットでは、「ヴィシュヴァーンタラ・ジャータカ」が、いくらか形を変えて「ディメクンデン」（Dri med kun ldan）という名前で、大衆劇、つまり、バコットによれば「最もよく演じられるチベット劇」となっており、粗野なチベット人たちの涙を誘っていたとされる。[28] バコットは、「ドワサンモ」（'Gro ba bzaṅ mo, Djroazanmo）という別の劇も、カンボジア人には「ヴォルヴォンとサウリヴォン」として、シャム人たちには「ヴ

ォラヴォン」として知られている劇の、少なくともあるエピソードには関連していると注記している。[29]「ノルサン」（Nor bzaṅ）あるいはスダナの劇は、チベットと東南アジアの両方で有名であり、マレー半島ではノーラ（Nora）という固有の舞踊を産んでいる。もう一つのジャータカの翻案（この場合はマニチューダ王子の物語であるが）としては、有名なチャンドラゴーミンがつくり、チベット語に翻訳された『ローカ・アーナンダ』（Lokānanda）がある。[30]チベットでは、ジャータカを含む劇の新年の上演は、少なくとも15世紀の後半から行われてきている。[31]

同じく日本においても、奈良の法隆寺の有名な玉虫厨子（そこには大乗経典からの物語が描かれている）からもわかるように、[32]ジャータカは早い時期から知られていた。ジャータカはもちろん三蔵とともに中国からもたらされた。『賢愚経』の漢訳は、コータンにおける説教を集めたもので、ジャータカにごく近いものであるが、聖武天皇自身によって書写され、荘厳されている。[33]ジャータカは984年に源為憲が著した『三宝絵詞』や、1257年に住信が完成させた『私聚百因縁集』、あるいは、おそらく14世紀の前半あるいは15世紀の前半のものである玄棟の『三国伝記』などの後代の作品といった日本の文学としても改作されている。[34]ちなみに日本の民衆文学の中にジャータカは言及されており、例えば、『曾我物語』[35]におけるように、読者あるいは聴衆は、それが何に対する言及であるか理解できたであろうことが分かる。近代においては、ジャータカやアヴァダーナについて、多くの研究や翻訳が、日本の学者によってなされてきている。[36]

東南アジアにおけるジャータカ

ジャータカが東南アジアに紹介されたのは、いつ、どのようにであったであろうか？　いったい誰によって、また、どの言語で紹介されたのであろうか？　いかなる答えも不可能である。テキストや年代記、あるいは、その地域における仏教の最も初期の頃、すなわち西暦１千年紀の間の歴史書は、現存していない。我々に得られるのは、いわゆるドヴァーラヴァティー国、あるいはモン文化――豊かな文学を持っていたに違いない、活力ある独創的な「インド化された」文化を持つ「失われた文明」――からの、図像学的、考古学的証拠だけである。この時代の最も初期のジャータカの図像は、ナコン・パトンのチュラ・

パトン・チェーティヤにある。[37]

幾分遅いものが、北東シャムのいわゆるシーマー石で、それは私が「チィ川流域文化」と読んでいるモン文化に属するものである。[38]

中国の資料からは、仏教が、紅河（ソンコイ川）流域（現代のハノイの辺り）の交阯の王国において、１、２世紀までに確立していたことがわかる。３世紀には、外国の僧がその地域に居住、あるいは、往来していた。初期のそして代表的なジャータカの集成である『六度集経』の漢訳者、交阯の康僧会には先に言及した。しかしながら、康僧会が『六度集経』のテキストを交阯で学んで、それを南京――彼はそこで翻訳したのであるが――まで運んだのか、あるいは、そのテキストを中国で入手したのかについては、はっきりしていない。

484年に扶南の王、カウンディンヤ・ジャヤヴァルマンは、インド僧ナーガセーナを斉の朝廷に上書とともに遣わしている。習慣に従って、その僧は貢ぎ物を贈ったが、その中には二つの象牙のストゥーパが含まれていた。ジャヤヴァルマンの上書に加えて、ナーガセーナは扶南についての報告書を皇帝に提出しているが、その報告書は次のような一節を含むものである。[39]

> 菩薩行は忍慈なり。本迹は凡基より起こる。一に菩提心を発こし、二乗を期する所に非ず。歴生して功業を積み、六度もて大悲を行ずる。勇猛劫数を超え、財命を捨して遺ること無し。生死厭うを為さず。六道にて有縁を化す。

この一節が、扶南における仏教の実際の状態を述べているわけでは、おそらく、ないであろう。ここにあるのは、まったく規範的な見解であって、一般的な大乗仏教による、菩薩の精神的な修行についての要約的記述を提示している。しかしながら、それは、「ジャータカ的イデオロギー」が扶南において、流布していたことを示唆しているのである。

11世紀以降のパガンと13世紀以降のスコータイの国々におけるテーラヴァーダ仏教文化の繁栄に伴って、我々はジャータカの形跡を豊富に見出すことができる。ここでは、我々は議論を後者に限定することにするが、そこでは、ジャータカが碑文において言及してあったり、有名なワット・シチュム寺院（Wat Sichum）の石版にジャータカの名前とともに刻まれているのを見ることができる。

シャムにおけるジャータカについての我々の議論は、古典ジャータカと非古典ジャータカという２つのカテゴリーの下に提示される。

1. 古典ジャータカ

「古典ジャータカ」という語によって私は「クッダカ・ニカーヤ」のジャータカおよびその注釈「ジャータカ・アッタカター」に言及する。これらのジャータカは、テーラヴァーダの伝統の範囲では古典なのであって、その中では、それらは三蔵の一部として伝えられ、そして、そのような意味において「テーラヴァーダ仏教」が広まったあらゆる場所において、その共通財産の一部となっているのである。

私は、「古典」(classical)、「非古典」(non-classical)という語を、より一般的な「正典」(canonical)、「非正典」(non-canonical)という語の代わりに用いている。「古典」という術語は、言うまでもなく相対的な価値を持つ。すなわち、例えば、ヴェッサンタラや他のある種のジャータカは、テーラヴァーダ仏教だけではなく、全ての仏教の伝統にとって古典であり、そして、それとは別の「非古典」的なジャータカは、タイ、クン、クメールなどというそれぞれ固有の「古典」を持つ各地方語の文学、あるいは文化にとって「古典」である。ここでは、私は「古典」(classical)という術語を、偈文と散文よりなる547話のジャータカ、すなわち、パーリ聖典のクッダカ・ニカーヤのジャータカおよびその註釈であるジャータカ・アッタカターとに見られるものに限定して用いている。(パーリ語のジャータカ集は、偈文のみが「正典」(canon)に属し、散文はそうではないという点で、正典という概念（the concept of canonicity）に疑問を投げかけるものである。テーラヴァーダ仏教の、散文のない偈文だけの集成は固有のものであり、諸派の中で唯一知られているものである。その［散文に表現される］物語の古さは、上述のように、インドにおける現存する最も初期の仏教芸術においてそれが表現されていることによって証明される。[40])

『サマンタパーサーディカー』において、ブッダゴーサはブッダの教えの９つの構成要素（navaṅga-buddhasāsana: 九分教）のうちの一つであるジャータカを「Apaṇṇaka から始まる550の物語」であると定義している。これはジャータカがどのようなものであるかという定義であるよりも、むしろ、単に、ジャ

ータカという区分（Jātaka-aṅga）を正典パーリ語ジャータカ集と同一視しているに過ぎないものである。この不十分さはジャヤヴィクラマによって指摘されている。

> ジャータカと呼ばれるアンガを現存する550話よりなるジャータカ集に同定することを正当化することはできない。まず第一に、物語それ自体が正典としての位置になく、「ジャータカ・パーリ」すなわち偈文のみのもののためのものなのである。第二に、他の経典類、すなわちディーガ・ニカーヤにおける「クータダンタ」や「マハーゴーヴィンダ・スッタ」に編入されているような、正典としての古さを持つジャータカを除外する理由が存在しない。個々に与えられている定義はきわめて独断的である。[41]

ジャータカのたいへん実用的な定義は、アサンガによって『声聞地』の第一瑜伽処に与えられている。

> 本生とは如何。過去世にあって世尊がそれぞれの生死の繰り返しの中で、菩薩行・難行（を行ずること）が説かれているもの、それが本生と云われる。[42]

説話的な側面は『大般涅槃経』における定義において強調されている。[43]

> 何等をか名けて闍陀伽経と為す。仏世尊、本菩薩為り、諸の苦行を修するが如きなり。所謂「比丘当に知るべし、我過去に於いて鹿と作り、羆と作り、獐と作り、兎と作り、粟散王・転輪聖王・龍・金翅鳥と作る。諸の是の如き等の、菩薩道を行ずる時に受くべき所の身なり。」是を闍陀伽と名く。

後代の学問的な伝統においては、ボーディサッタの過去の行為の記述としてのジャータカは、六波羅蜜の行の完成（pāramī, pāramitā）の実例を示すものとなっている。波羅蜜の理論体系に組み入れられたジャータカは、釈尊の徳を例示するものであり、また、将来の生においてブッダたることを志す者たち、すなわち菩薩という概念の着想点を提供しているのである。

シャムにおいては、正典ジャータカはしばしば「アッタカター・ジャータカ」あるいは「ニパータ・ジャータカ」として言及される。すなわち、「一偈の章」

（エーカ・ニパータ）から、「大いなる章」（マハー・ニパータ）までの正典の章立てによって組織されたジャータカの集成としてである。[44] 別の名称としては、「500の生涯（誕生）における尊者［ボーディサッタ］についての［物語］」を意味するPhra chao ha roi chat がある。最後の10の生涯については、Dasajāti, Dasajāti-jātaka あるいは Phra chac sip chat 、つまり「10の生涯」あるいは、「［最後の］10の生涯における尊者（ボーディサッタ）についての［物語］」として、あるいはまた、「マハーニパータ・ジャータカ」つまり「大いなる章のジャータカ」として、しばしば独立して伝承されてきている。

途切れることのない人気を持つ「ヴェッサンタラ・ジャータカ」は、プラ・ヴェッサントン（Phra Wetsandon）、マハチャート（Mahachat, 偉大なる生涯）、あるいは、偈のみが読誦される場合には、カタ・パン（Katha [Gāthā] phan, 1000の偈）として、それ自体独立したものとして伝承されてきている。[45] マハチャートの読誦は、前近代における重要な儀式であり、今日もそのようなものであり続けている。[46] もう一つの儀式である大ヴェッサンタラ積功徳祭（bun phra wet＝puñ[ña] braḥ ves[antara]）は、東北シャムおよびラオスにおける年中儀礼にとって不可欠な要素となっている。[47] 読誦と上演とは、功徳を積むための一連の行為の一部となっているのである。

タイ語では、多くのヴァージョンのヴェッサンタラ・ジャータカが存在している。これらの中には、「マハチャート・カムルァン」（Mahachat kham luang）つまり、BE 2025（1482）にパラマトライローカナータ王（Paramatrailoka-nātha）の王室によってつくられた「王室版」や、ソンタム王（Song Tham, r. 1610-1628）の統治の間につくられたと信じられている「カップ・マハチャート」（Kap mahachat）や、19世紀にクロムマムン・カウィポット・スプリーチャ（Krommamun Kawiphot Supreecha）によってつくられた「マハチャート・カムチァン」（Mahachat kham chan）などが含まれている。[48]「マハチャート・クロン・テート」（Mahachat klon thet）、あるいは「ラオ・ヤオ・マハージャーティ」（Ray yao mahājāti）[49] など[50]という「説法用」ヴァージョンは、数多く存在している。いくつものラーンナー語のマハチャートやペチャブリ版マハチャート（Mahachat muang phet）や東北タイ版マハチャート（Mahājāti sam-nuan isan）やコラット版 Mahachat（Mahājāti korat）など、ヴェッサンタラ・ジャータカの局地的な地方語によるヴァージョンもたくさん存在している。

ジャータカが広く普及していることは、中でも特に記録の残っている、北部において行われた写本調査によって例証される。すなわち、マハチャートは、18以上の言語のスタイルで1424のテキストに見られ、「多くが地方の僧によって著されている」ジャータカ物語一般は、907のテキストに見られるのである。次に大きなグループである「ダンマ一般」は、472のテキストを含むものである。[51] ウドム・ルングルアンスリ（Udom Rungruangsri）は、異なる著者によって著された130のヴァージョンのヴェッサンタラ・ジャータカに言及している。[52]

ヴェッサンタラ・ジャータカの人気の一つの理由は、「マーレーヤ・スッタ」（Māleyya-sutta）とその関連文献を通して普及した信仰、すなわち、このジャータカを聞くことによって、人は、タイ語では「プラ・スィ アン」（Phra Si An, Phra Śrī Ārya Maitreya）としばしば呼ばれる、次のブッダ、メッテーヤ（Metteya, 弥勒）に会うことができるとする信仰にある。[53]「マーレーヤ・スッタ」に続いてヴェッサンタラ・ジャータカを読誦することは、CE 1201年のパガンの碑文にも言及されている。[54]「大ヴェッサンタラ・ジャータカの御利益」に関する、北タイ語のテキストは次のように述べている。[55]

> 栄光あるメッテーヤ菩薩にまみえたい（中略）と願うものは、次のような供物を捧げなさい。1000の灯明、1000の蠟燭と線香、（粘りけのある）米の1000個の塊を。（中略）礼拝し、大いなる敬意をもって一日で終わる、大ヴェッサンタラ・ジャータカについての説法を聞きなさい。（中略）彼の願いは全てかなうであろう。（中略）未来において彼はその仏の前で涅槃を得るであろう。

他の理由として、説法を聴聞したり、その施者となることにより功徳を得ることを願ったり、あるいは、地方的な習慣としては、雨乞いのためということがある。[56] 説法は様々な方法で行われるが、盛大な飾り付けと儀式、そして、たくさんの種類の供物と音楽伴奏を伴っている。バンコック時代の初期には、王子は、出家期間中に父である王に、ヴェッサンタラ・ジャータカについての説法を捧げるというのが、王家の習慣であった。たとえば、第二代の治世2360［1817］年には、モンクート（Mongkut）王子（ラーマ４世となる人物）は、沙弥（sāmaṇera）として出家し、「マッディーの章」についての説法をラーマ２世に捧げている。第四代の治世の2409［1866］年には、チュラロンコーン（Chula-

longkorn）王子（ラーマ５世となる人物）は、「サッカの章」を彼の父である王によって作られた版によって捧げている。第五代の治世においては、マハヴァジラウンヒス（Mahavajiraunhis）王子が、「サッカの章」を2434［1891］年に、クロムマルン・ナコン・ラジャスィマ（Krommaluang Nakhon Rajasima）王子が「六人の貴人の章」を捧げている。[57]

ジャータカをタイ語の韻文に翻訳するという伝統は今日まで続いている。もっとも最近では、トッサチャート・カム・チャン（Thotsachat kham chan, 韻文訳10ジャータカ）が、国王の歳が６巡りした（すなわち72歳の誕生日を迎えた）ことを記念して作られた。[58]

2. 非古典ジャータカ

「『パンニャーサ・ジャータカ』は、特にサンスクリット語のアヴァダーナ文学や、東南アジアの民衆仏教の色々な側面とに関連した比較文献学の領域を遥かに超えた価値があるものと理解されるべきである。」P. S. ジャイニ[59]

非古典ジャータカは、古典的な物語をモデルとした「本生話」ではあるが、それとは異なり正典外のものとして、ある特定の地域において伝承されてきたものである。東南アジアにおいてはこのようなテキストは非常にたくさん存在している。――いくつかは(多様なヴァージョンで)その地域全体に知られており、いくつかは一、二の地域、文化、言語にのみ特定のものである。非古典ジャータカは、タイ語では「バーヒラカ・ジャータカ」(bāhiraka-jātaka）あるいは「チャードク・ノク・ニバート」(chadok nok nibat）すなわち「ニパータ外のジャータカ」と呼ばれているが、後者がダムロン・ラジャヌバブ王子殿下（Damrong Rajanubhab）によって20世紀初めに造られた語でないならば、これらの語がいつ用いられるようになったのかは定かではない。北タイ語の経典目録『ピタカ・マーラー』(Piṭakamālā）は、パンニャーサ・ジャータカを「結集（saṅgāyanā）外の50の生涯」と呼んでいる。[60]これは、「非古典」という概念に近いものであるかもしれない。しかしながら、テキストと結集(saṅgāyanā）との関係は複雑である。このような複雑さは、『サーラサンガハ』において、その編者が、『ナンダ・ウパナンダ・ダマナ』（Nandopanandadamana）などのテ

キストを、それらが「3回の結集より伝承されてきたものではない」(saṅgīti-ttayam anārūḷhaṃ) にも関わらず、認容しているようであるということにも見られるであろう。そのようなテキストのうちの2つが、『クルムバ・スッタ』(Kulumbasutta)、『ラージョーヴァーダ・スッタ』(Rājovādasutta) というように「経」(sutta) とされることは注目に値する。『サーラサンガハ』が、大乗経典やタントラ類を「仏説ではない」(abuddhavacana) として否認しているのとは対照的である。[61]

非古典ジャータカというのは、独自の価値を持ってそれぞれ個別に伝承されてきた、独立したあるいは「未収の」ものであるといってよいであろう。あるいは、それらは、他のテキストと一緒に選集に集められている場合もあるであろう。同じ物語がいくつかのコンテキストにおいて、それぞれ個別に、あるいは、aというコレクションの一部、あるいはまたbというコレクションの一部などというように、伝承されていることもある。[62] 選集の中の、ある一般的なタイプが、50の物語を(理想的には)含むものであって、「パンニャーサ・ジャータカ」というタイトルを持つのである。パンニャーサ・ジャータカは、それが、パーリ語のものであろうと、東南アジアの地方語のものであろうと、以下に挙げるような理由で、非古典ジャータカそのものと別のものとして捉えられるべきでない。すなわち、それ(パンニャーサ・ジャータカ)は、それらの文献(諸非古典ジャータカ)に依存し、またそれらを利用しているのであって、その反対ではないのである。

独立したジャータカの中には、「ローカルなジャータカ」すなわち、ジャータカの物語構造に当てはめられ、地域的な地方語の伝統によって伝承されてきたいくつかの物語が含まれている。それらは大変たくさんあるので、ここで数え挙げることはできない。[63] さらに、一つのジャータカが、同一の地域においていくつもの伝承として伝えられていることもあるであろう。人気のある物語には、北部における『ブラフマチャクラ』(Brahmacakra)、北東部における『サン・シンチャイ』(Sang Sinchai)、中央部における『ノク・クラチャプ』(Nok Krachap)、そして南部における『スビン』(Subin) といったものが含まれる。[64] ウドム・ルングルアンスリは、『ランナー文学』という著書で、ハラルド・フンディウス (Harald Hundius) によって記録された200以上の物語の中から、100の北部ジャータカをリストアップしている。[65] いくつかはかなり長く、10から15

束(phuk)よりなる。ウドムは『ホラマン』(Horaman：ハヌマーンの物語)、『プロムマ・チャック』(Phrommachak, Brahmacakra：ラーマの物語に基づくもの)、そして『ウッサバロート』(Ussabarot：彼はバラモン文学に影響されたものと記している)の要約をしている。これらのテキストはラーンナー語で書かれているが、パーリ語と混交したものである。それらの全てにパーリ語のオリジナルがあったかどうかについてはこれから検討されねばならない。東南アジアにおける『ラーマキエン』に関係するラオス版の『ラーマ・ジャータカ』がある。[66] この長大な文学を本稿で扱うことはできないので、このようなジャータカの数が何百にものぼり、このジャータカ文学なるものが、前近代文化のきわめて重要な部分であったということを強調するに留めておきたい。[67]

我々は、ジャータカというものがはっきりした範疇を持つものではないということを心に留めておくべきである。同一の物語が、同時にあるいは別の時に、ジャータカ、デーシャナー（説法）、アーニサンサ（功徳文）、パリッタ（護呪）、あるいはスートラ（経典）として、異なった働きを持つということはあり得る。カンダヴァッタ・ジャータカ（Khandhavatta-jātaka）は、ジャータカ（No. 203)、律（Cullavagga, II 110)、経（Aṅguttara-nikāya II 72-73）に、そしてパリッタ(Khandha-paritta)に属している。他の古典ジャータカの偈は、お守りや祝福のためのものとして唱えられる。たとえば、孔雀護呪（Mora-paritta)[68]、六牙象護呪（Chaddanta-paritta)[69]、鶉護呪（Vaṭṭaka-paritta）[70]におけるように。最後のものの要点の偈となっている「真実語」(saccakiriyā）は、スリランカの２つの銘刻から知られる。すなわち、アヌラーダプラにあるアバヤギリ・ヴィハーラの遺跡における、約10世紀のナーガリー文字で銅板に刻まれたもの[71]と、デーディガマにあるコータヴェーヘーラ（Koṭavehera）の主チェーティヤの第三石室の覆い板の下部に「薄く刻まれた形の悪い12世紀のシンハラ文字」で刻まれたもの[72]とが見つかっている。その偈が火事を避けるお守りとして意図されたことが指摘されてきている。ジャータカの偈をパリッタ（護呪）として使用することは、ボーディサッタの真実語――たとえそれが孔雀、象、鶉としての生涯におけるものであったとしても――の力を表したものである。

東南アジアにおける非古典的なテキストは、おしなべて多機能なものである。パーリ語の「ウンヒッサ・ヴィジャヤ」(Uṇhissa-vijaya）――北インドの「ウシュニーシャ・ヴィジャヤ」(Uṣṇīṣavijaya）に関連した物語――は、護呪、ス

ートラ（経典）、アーニサンサ（功徳文）、ジャータカ、そして、カム・リリット（Kham lilit：タイ語の偈文ヴァージョン）として独自の価値を持って存在しており、それは、『パラマッタ・マンガラ』（Paramattha-maṅgala）や『マハーディッバ・マントラ』（Mahādibbamantra）といった、より長いテキストの中に埋め込まれている。『ジャンブーパティ・スートラ』（Jambūpati-sūtra）は、ジャータカとアーニサンサを含んでおり、『針の献供のアーニサンサ』に要約されて編入されている。

パンニャーサ・ジャータカ[73]

パンニャーサ・ジャータカというタイトルを持つジャータカ集は東南アジアにいくつか存在している。タイトルは様々に異なっており Phra chao ha sip chat（50の生涯における尊者（ボーディサッタ）の［物語］）というように、地方語の形で存在している。これらの集成における大部分（全くすべてではないが）のジャータカが、非古典的なものである。物語は多様ではあるが、多くは、布施あるいはほどこし（dāna）――（物質的な譲渡のみならず究極の犠牲、すなわち身体や生命のほどこし）と、倫理的な振る舞いとそれらの功徳（ānisaṃsa）について扱うものである。真実語（saccakiriyā）は際だった位置を占める。主人公であるボーディサッタは多くの場合王子であり、話の多くは恋愛物語として描かれているといってよいであろう。物語の源泉は様々であり、いくつかはインドまで遡れるし、いくつかは地方的な創作である。そのジャータカ集は「ローカルな」パーリ語からニッサヤ形式（タイ方言と混交したパーリ語）、地方語までの様々な文字と言語で伝承されてきている。[74]

レオン・フェールはパンニャーサ・ジャータカについて論じた最初のヨーロッパの学者であったが、その論文は1875年に『ジャーナル・アジアティーク』誌に発表されている。[75] 彼にルイ・フィノーが続くが、彼は、1917年に出版された古典的名著『ラオス文学の研究』（Recherches sur le littérature laotien）において、ある程度詳しくその主題について紹介している。[76] テラル（マルティニ）[77]、デディエ[78]、シュヴァイスグート[79]、ジャクリーン・フィリオザ[80]といったフランス人学者が、重要な貢献をし続けてきている。英語では、ドロシー・フィックルが、主にタイ国立図書館版に基づいて、残念ながら未出版ではあるが、[81] 博

士論文を著している。そして、パドマナーブ・ジャイニは、いくつかの論文を発表した後、『チェンマイ50話』（Zimmé Paṇṇāsa）の校訂と翻訳とを出版している。[82] タイ国では、ダムロン王子、ニヤダおよび他の何人かによる先駆的な研究がなされてきている。[83]

諸パンニャーサ・ジャータカ集は東南アジアの大陸部においてのみ知られている。それらはインドやスリランカにおいては（ここ数世紀のうちにいくつかの写本が後者に伝わってはいるものの）知られていない。[84] 私が「諸パンニャーサ・ジャータカ集／Paññāsa-jātaka collections」と複数形を用いるのは、現存するいかなる「パンニャーサ・ジャータカ」も（それがパーリ語のものであれ、諸地方語のものであれ、ビルマ、シャム、ラオス、ランナーあるいはカンボジアに由来するものであれ）、一つとして同じものはないからである。すなわち、それらは、テキストの数もその順序も異なる、本質的に別の集成なのである。同じテキストが２つの集成に含まれる場合でさえも、テラルが「サムッダゴーサ・ジャータカ」について、また、吉元が「スルーパ・ジャータカ」について示しているように、その系統はおそらく異なったものであろう。現在、どの集成がスタンダード（もしそういうものがあるとしてではあるが）であるかを決める根拠は何もない。したがって、私は「パンニャーサ・ジャータカ」と単数によって言及する事を控えるのである。

それは、はなはだしく異なる様々な系統において存在する物語集に対する標準的な名前だったのかもしれない。古典パーリ・ジャータカそれ自体が確定されたものであるとは言えない。つまり、タイトルは伝承や銘文ごとに異なっており、最後の10話の順序は同一ではない。[85] タテルマンは、『ディヴヤ・アヴァダーナ』の、1886年にカウエルとニールによって編集された、38話を含む今日「スタンダード」としてよく知られている版について次のように記している。

> 「ディヴヤ・アヴァダーナ」というタイトルを持ついくつかの写本はそれぞれはなはだしく異なっている。岩本裕はすべての写本に存在するのはたった７つのみであって、それらの中で常に同じ場所に存在するのは、それぞれ第１話と第２話である「コーティカルナ・アヴァダーナ」（Koṭikarṇāvadāna）と「プールナ・アヴァダーナ」（Pūrṇāvadāna）というたった２つのみであると見ている。実際岩本はディヴヤ・アヴァダーナを、「コー

ティカルナ」と「プールナ」という2つの物語で始まるサンスクリット語アヴァダーナの集成と定義しているのである。[86]

『賢愚経』は、中国語、チベット語、モンゴル語への翻訳を通して知られる物語集である。この集成は単独の源泉に遡ると考えられてきたが、漢訳では2つのヴァージョンが存在している。チベット語版は、漢訳からの重訳といわれてきたが、どちらの漢訳とも一致しない。モンゴル語訳はチベット語から翻訳されたと言われているが、後者が51話からなるのとは異なり、52話からなるのである。メアは次のように記している。[87]

漢訳とチベット語訳のヴァージョンは、いくつかの点で疑いなく関連する一方で、含まれている物語の数や、それらの順序や、それらが書かれているスタイルは著しく異なっている。さらに、チベット語とモンゴル語のヴァージョン中に存在する3つの物語が、その経典の（中略）漢訳の最も初期の完全な刊本には、存在すらしていない。

唐臨によって7世紀中頃に編集された仏教説話集である『冥報記』は、混乱した状態で残存している。ジャートソンは高山寺本と前田家本について次のように述べている。

第1巻における説話の順序は両写本とも同一であるが、（前田家本にはあるが高山寺本には見られない4つの話のうちの）第2巻に見られる2つの付加的説話と第3巻に見られる2つとを含め、第2巻と第3巻においては異なっている。（中略）おそらくオリジナルの『冥報記』を構成したと考えられるいくつかの説話は、様々な説話集においてみられるが、両写本においては、それらがその選集のオリジナルなものを表しているわけではないこともまた明らかである。[88]

平安時代末あるいは鎌倉時代（12-13世紀）の作品である『唐物語』に収められた27の説話のオリジナルな順序ははっきりしていない。[89] 同じような食い違いは鎮源の『大日本国法華経験記』の現存する諸本の間にも起こっている。[90] パンニャーサ・ジャータカだけが流動的な集成というわけではないのである。

いくつかの「パンニャーサ・ジャータカ」が得られる（さらに他にも得られる可

能性がある)、という事実は、術語上の問題を引き起こす。「国」の表記――ビルマ版、ラオス版、タイ版――は、誤解を導くものであるので、私は、入手可能な版本を、できるだけ明確に、それらが出版された土地あるいは場所によって言及することにしたい。繰り返しになるが、それらの集成は内容においても、構成においても言語においても異なっているのだから、それらは、○○系とか××版と呼ぶことはできないのである。したがって、私はそれらを、フィックルが同じような理由でそうしているように[91]、「諸集成」(collections)と呼ぶことにしているのである。

古典ジャータカと同じように、パンニャーサ・ジャータカの諸集成の中の物語は、散文のところどころに偈文を含むものである。パンニャーサ・ジャータカの偈文が、テーラヴァーダのジャータカの偈文と同じように物語と区別して伝承されたことがあったであろうか？　そのような偈文の集成は現存していない。確かに、『チェンマイ50話』のそれぞれの物語が、(そしてタイ国立図書館の『パンニャーサ・ジャータカ』のほとんどの物語が) 当該の物語の最初の偈の最初の行の引用によって始まっている。例として、『チェンマイ50話』の最初のジャータカである「アーディッタ・ラージャ」(Ādittarāja) を引用してみよう。

> yadā bhonto supino me ti. idaṃ satthā jetavane viharanto attano pubbakatadānapāramim ārabbha kathesi.

yadā bhonto supino me というのは、最初の偈の初行 [の引用] である。しかし他の証拠が存在していない以上、このような冒頭部分は単に古典ジャータカの冒頭部分――偈の引用に始まって satthā ... viharanto ... ārabbha kathesi という定型句が続く形式――を模倣しただけという可能性の方が高いようである[92]。

加えて、さらに注目すべき点として、『チェンマイ50話』の偈文はしばしばタイ国立図書館の集成に見られる偈文とは異なっているということがある。すなわち、同じ概念、あるいは同じ概念の展開が、いくぶんは共通する語彙によって表現されているけれども、文の組み立て(言葉づかい、韻律)はかなり異なっている。例として、「サムッダゴーサ・ジャータカ」を引用しておこう[93]。

クメール／シャムのテキスト

Taṃ sutvā bodhisatto anantaraṃ gāthām āha:

Yadā pucchāmi brāhmaṇe taṃ pavuttiṃ suṇomi 'haṃ
Tañ c'eva me cintayato ummatako jāto mano
Tasmā cajeyyaṃ attānaṃ tava saṃgammakātaṇā
Cajetvā mātapitaro āgato tava santike ti.

『チェンマイ50話』(Zimmè Paṇṇāsa)

Taṃ sutvā bodhisatto somanassapatto imaṃ gāthadvayam āha

Bhadde pucchāmi brāhmaṇe tuyhaṃ guṇaṃ suṇāmi 'haṃ
Ahaṃ taṃ cintayanto so ummato jāyate sadā (20)
Tasmā pahāya me raṭṭhaṃ karomidha tayā vāsaṃ
Chaṭṭevā mātapitaro āgatāsmi tavantike ti. (21)

いくつかのケースでは、あるヴァージョンにある偈が、他のヴァージョンにはない。[94] したがって、古典ジャータカとパンニャーサ・ジャータカの間の重要な一つの相違点として、前者は一定の偈文の集成であって、それに散文の物語が作られていったのに対して、後者は偈文を伴う、あるいは偈文によって部分的に表現される物語や説話の集成であるということを指摘できるであろう。もう一つの相違点は、パンニャーサ・ジャータカの偈文それ自体がしばしば物語を構成するものであることである。古典ジャータカの場合には、最後の数話などいくつかの物語のみがそのようになっている。

パーリ語のものであれ地方語のものであれ、どの刊本にも、偈文には通し番号がつけられていない。したがってどれだけの数の偈文があるかを述べることはできない。諸パンニャーサ・ジャータカ集の今後の研究において、望まれるものの一つに、パーリ語、地方語を問わず、出版された諸版の偈文のパーダ・インデックスがある。これは、パンニャーサ・ジャータカと他の仏教文学そして実際、非仏教文学との関係を決定するのに役立つであろう。たとえば、外典である『ジャンブーパティ・スッタ』のいくつかの偈文は、パンニャーサ・ジャータカにパラレルなものが(そして文体や語法の点での類似も)見られ、長大で重要なシャムのパーリ語テキストである『ローカネーヤッパカラナ』(Lokaneyyappakaraṇaṃ) においても、ジャイニはタイ国立図書館版のパンニャー

サ・ジャータカとパラレルな12偈、そして、『チェンマイ50話』のものとパラレルな2偈を発見している。[95]

諸パンニャーサ・ジャータカ集は、大きく分けてパーリ語のものと地方語のものという2つに分類できるかもしれない。現在2つの主要なパーリ語の伝統が知られている。それは、ビルマからのものとシャムからのものであるが、前者のみが出版されている。ランナーおよびランチャンにおいては、これまでパーリ語のパンニャーサ・ジャータカの写本は発見されていない（後で見るようにワット・スンメン寺院のランナー・タイ語のニッサヤにはほとんど完全なパーリ語テキストが埋め込まれているのであるが）。[96] 諸学者はこれまで伝統的にパーリ語に優位性を認めてきたのであるが、地方語版とパーリ語版の関係は、各物語ごとに慎重に精査されねばならない。いくつかの物語は地方語からパーリ語に翻訳されたかもしれないことを、心に留めておかねばならない。なんといっても、スリランカのテーラヴァーダの古典説話文学のいくつかもそのようであったのである。ダンマパダの物語も、5世紀にシンハラ・プラークリットからパーリ語に翻訳されたものであり、その後13世紀に拡張されたヴァージョンで再びシンハラ語に翻訳し直されている。この新しいシンハラ語のヴァージョンは「独自性と固有の生命」を持つものである。[97]

パーリ語というのは、異なる言語を話していた、そして話している人々によって用いられる書きことばなのである。東南アジアのパーリ語作品と古典的な作品との重要な一つの相違点は、後者の大部分が他の諸プラークリット語からパーリ語に翻訳される一方、東南アジアの諸説話がモンやタイ語などの様々に異なる諸言語族から翻訳されたことである。15世紀のチェンマイの僧であるボーディラムシ（Bodhiraṃsi）は『チャーマデーヴィー・ヴァンサ』（Cāmadevīvaṃsa）の冒頭において、それがタイ語（deyya-bhāsā）からの翻訳であることを述べている。それゆえ、パーリ語が「オリジナルなテキスト」であると固執するのは思い違いであり、それぞれのテキストの歴史は注意深く調査されねばならないのである。[98]

ジャイニや他の学者たちは、『チェンマイ50話』の物語のいくつかの源泉を跡づけている。ここで私たちは再び日本の説話集である『唐物語』の場合と比較してみよう。ゲッデスは次のように書いている。

『唐物語』の27の物語は、２つを除いて、すべて古い中国の源泉をたやすく見つけることができる。しかしながら、編者が中国の文献に依ったのか、『唐物語』の出現に先行して存在した、それらの物語の日本語版に依ったのかを解明することは不可能であるように思われる。多くの物語が、複数の中国の文献に見られ、この点でも、ある文献がある物語の日本語版の典拠であると断言的に述べることは不可能である。加えて（中略）『唐物語』が、すでに失われてしまった中国の、あるいは日本の文献と密接に関連していると可能性が考慮されるならば、典拠を跡づけ選別するという仕事は、決して最終的な解答を得ることのできないものであると考えられるべきものである。[99]

このような評価は諸パンニャーサ・ジャータカ集にも同じく当てはまるものである。

1. シャムにおけるパンニャーサ・ジャータカ

国立図書館版

田辺和子は、バンコックの国立図書館のパンニャーサ・ジャータカ諸本からの、いくつかのジャータカのローマナイズパーリ語校訂テキストを出版している。しかし、パーリ語の集成全体に対する研究あるいは校訂はこれまでなされていない。バンコックの国立図書館、ワット・ボヴァラニヴェート寺院（Wat Bovoranivet）および他の寺院の書庫、さらにパリの国立図書館、コペンハーゲンの王立図書館、京都の大谷大学図書館などに存在している諸々の Khom 文字貝葉写本よりその集成は成り立っている。[100]

仏暦2466（西暦1923）年、国立図書館は、パンニャーサ・ジャータカのタイ語訳をダムロン王子の指揮の下28分冊で出版した。ジャータカごとに異なる翻訳者が責任者となった。[101] この集成は２冊本として2499［1956］年に再版されている。[102]

それには全体で61の物語が収められており、vagga に章分けされてはいない。[103] それは50の物語（48話が第１巻に２話が第２巻に収録）よりなる「前分」と別の11の物語と付加的な三つの短い物語（Pañcabuddhavyākaraṇa, Pañcabuddha-

śakarājavarrṇanā, Ānisaṅs pha paṅsukula）よりなる後分（pacchimabhāga）に分けられる。[104] タイ語翻訳は多くの偈をパーリ語のまま保持しているが、それは編集と標準化の痕跡を残している。

パンニャーサ・ジャータカの訳の序文において、ダムロン王子は、パーリ語の完全なセットを見つけるのは何年もの間できなかった、そして、最終的にはいくつかの異なった寺院の集成を合わせて一つにしたが、それはワット・パトゥンコンカ寺院（Wat Pathumkhonkha）からの写本によって2466（1923）に完成したと述べている。Niyada は、国立図書館の35の写本の内容を、タイトルと束（phūk）によってリストにするという大きな貢献をしている。[105] 彼女のリストは、パンニャーサ・ジャータカの伝播の複雑性を示すものとなっている。最も一般的なセットの一つが Samudaghosa-jātaka から始まることは明らかである。しかし、多くの写本で同じテキストが同じ順序で現れるものの、各束に分配されるタイトルはまちまちである。さらに、この一般的なセットが、時には Paññāsa-jātaka ban ton「パンニャーサ・ジャータカの前半」であると記述され、時には Paññāsa-jātaka ban plai「パンニャーサ・ジャータカの後半」と記述されている。他の雑多なジャータカのグループもまた、Paññāsa-jātaka と記述される。結局、「完全なセット」とはいかなるものであるかについては、全く不明なのである。

ban ton（前半）と ban plai（後半）の問題については、国立図書館版の第2巻の序文の脚注に、次のような注記が、プラ・ピニット・ワンナカン（Phra Phinit Wannakan / Braḥ Binic Varrṇakāra）によって記されている。

> このパンニャーサ・ジャータカは、これまで調査された写本によれば、2つに区分される。一つは Paññāsa-jātaka ban plai（パンニャーサ・ジャータカ後半）であるが、しかしながら、その ban ton（前半）は存在していなかったようである。別の区分としては Paññāsa-jātaka-paṭhamabhāga（前半）、あるいは Paññāsa-jātaka-pacchimabhāga（後半）である。Paññāsa-jātaka ban plai は広範囲に見られるが、Paññāsa-jātaka-paṭhamabhāga および Pacchimabhāga はまれである。一読すれば、Paññāsa-jātaka ban plai と Paññāsa-jātaka-pacchimabhāga とは同じものであるだろうと仮定してしまう。（というのも、一方はタイ語で一方はパーリ語であるが、ど

ちらも「後半」を意味するのであるから。）しかしながら、調査をしてみると、想定するのとは逆の対応が見られる。すなわち、Paññāsa-jātaka ban plai は、ちょうど50の物語よりなる完全な作品である Paññāsa-jātaka-paṭhamabhāga に相当するのである。このことは、Paññāsa-jātaka ban plai の著者はもともとそれを［古典パーリ語ジャータカの］Paññāsa-nipāta（50偈の章）に当てはめることを意図していたのではないか、という仮説へと導く。後になって、何者かが、付加的な14の物語を著し、それらを［全体として］独立した一つの作品にし、ニパータの中に含めないこと（すなわち上述の古典ジャータカの Paññāsa-nipāta に含めないこと）を意図して、彼は Paññāsa-jātaka ban plai を Paññāsa-jātaka-paṭhamabhāga に変更し、新しく付加した部分を Paññāsa-jātaka-pacchimabhāga と呼んで、［古い部分と新しい部分との２つを結合したのである。］

プラ・ピニットの仮説は、パンニャーサ・ジャータカという名前を説明することから始まっている。この集成が古典ジャータカ集における Paññāsa-nipāta（50偈の章）に当てはめられるように意図されていたということを提唱しているのである。Paññāsa-nipāta における「50」（paññāsa）は、この章が50の偈を含むジャータカ物語によって構成されることを意味しているのであるから、この理論は支持できない。それは、50のジャータカよりなるとか、なるべきであるということを意味してはいないし、実際 Paññāsa-nipāta には、わずか３つのジャータカしか存在していない。

プラ・ピニットが、パンニャーサ・ジャータカの Paṭhamabhāga（前半）と Pacchimabhāga（後半）をそれぞれ一人の著者によって著されたものとして扱っていることももう一つの問題点である。それぞれの物語の多様な起源についてだけではなく、異なる集成における内容の多様さを考慮するならば、たとえ teng という語の意味を「編纂する」という意味にまで拡張したとしても、現実的ということはできない。さらに、ban ton および ban plai という術語は、たとえば、『ヴィスッディマッガ』（Visuddhimagga）や『ダンマパダ・アッタカター』（Dhammapadaṭṭhakathā）のような他の長い写本（さらには刊本でさえも）を記述する際にも広く使われるのであって、それらは、編者というよりも、むしろ本を作る職人の慣習であろう。すなわち、大きな集成は、一つの包みに入

れるには大きすぎ、二つに分けなければならないのである。

集成の起源がいかなるものであるにしろ、パンニャーサ・ジャータカに含まれる個々の物語が、シャムの文学に多大な影響を及ぼしたことは明らかである。このことは、タイ国文化省芸術局（Fine Arts Department）のリプリント版の序文（kham nam）に注記されている。

> シンラパバンナカン出版（Sinlapabannakhan Printers）は、『パンニャーサ・ジャータカ』を印刷し、配給する許可を求めてきた。芸術局は、この本が宗教文学（dhammagatī）に分類されるものであっても、大部分の宗教書とは異なり、とても読みやすい説話を含んでいると考える。説話のいくつかはクロン（khlong）やチャン（chan）や戯曲の源泉として用いられており、多くのものが、「サムッタコート・カムチャン」（Samuttakhot kham chan）という詩や、「スダナ（Phra Sudhana）とマノーラ（Manora）」、「サントン」（Sang Thong）、「カウィ」（Khawi）といった戯曲や「ロータセーン（Phra Rothasen）の物語」といった有名な文学作品となっている。

ダニット・ユフォ（Dhanit　Yupho）は、『ニタン・ワンナカディ』（Nithan wannakhadi）という著書で、パンニャーサ・ジャータカをタイ文学という身体に流れる動脈に喩えている。パンニャーサ・ジャータカのタイの韻文学に対する影響は、ニヤダの著書（もともとはチュラロンコーン大学に提出した博士論文）の主題である。[106]

ニヤダは21のジャータカを列挙して、それらがカム・カップ（kham kap）、カム・クロン（kham khlon）、カム・チャン（kham chan）、リリット（lilit）、戯曲、ボット・カップ・マイ（bot khap mai）およびボット・マホーリ（bot mahori）といった様々なジャンルの63のタイ語の詩作品の源泉として機能していることを論じている。

「サムッタコート・カムチャン」を含む重要な韻文ヴァージョンは、ナライ（Narai）王（1655-1688）の王室におけるマハラーチャクル（Maharatchakhru / Mahārājagarū）によって始められ、ナライ王自身によって続けられ、パラマヌチット（Paramanuchit）王子猊下（1790-1853）によって完成された。[107] この物語はよく知られており、トンブリのワット・ドゥシタラン寺院（Wat Dusitaram）の19世紀の壁画に描かれている。「スダヌ」（Sudhanu）と「サッバシッディ」

（Sabbasiddhi）には、カムチャン版もある。パンニャーサ・ジャータカからの3つの物語——「サムダゴーサ」（Samudaghosa）[108]、「スンバミトラ」（Sumbhamitra）（これにはパンニャーサ・ジャータカが原典であると明記されている）[109]、「バハラガーヴィー」（Bahalagāvī）[110]——が、ラーマ一世の請願により、プラヤ・タンプリーチャ（Phraya Thampreecha [Kaew]）によって著された『トライブーミ・ヴィニッチャヤ・カター』（Traibhūmilokavinicchayakathā）の中に埋め込まれている。ラーマ二世の有名な作品の一つは、「スバンナサンカ・ジャータカ」（Suvaṇṇasaṅkha-jātaka）の戯曲版である、「サントン」という劇である[111]。「サントン」の翻案ものや、「マノーハラー」（Manoharā）や「ラタセーナ」（Rathasena）といった他のジャータカは、上演され続けている[112]。また、本稿執筆時点（2001）では、「スダナとマノーハラー」の翻案ものがテレビで毎週放映されていた。

諸々のジャータカおよびそれらの相互関係、諸パンニャーサ・ジャータカ集に対する関連を理解することは、タイ文学の理解にとって不可欠である。このような影響が、パンニャーサ・ジャータカの中の個々の物語のものであって、セット全体としてのものではないということを理解しておくことは重要である。換言すれば、古典的なシャムの文学は、個々の物語を50話のセットからの抜粋としては扱っていないということである。個々の物語はそれぞれ独自の価値を持って存在しているのである。

実際、古い中央タイの地方語で書かれた集成は、知られていない、あるいは、写本目録にリストアップされていない、ということに注目すべきである。すなわち、以下に論じるような北タイやラオスの地方語で書かれたいくつかの集成に相当する中央タイ語のものは存在しない。シャム中部において、個々のジャータカが伝承され、語られ、そして語り直され、さらに上演されるが、たった一つの集成しか存在しておらず、そしてそれはパーリ語のものであって、その歴史、構成、内容さえもはっきりしていない。中央タイ語文学において、50話のセットとしての「パンニャーサ・ジャータカ」いうタイトルに対する言及はまれなのである。

ラーンナーとワット・スンメン寺院コレクション

パンニャーサ・ジャータカの諸集成は、北部シャム、すなわちラーンナーと、

ナーンやプレーのような他の県においては広く行き渡っている。経典の書写に対する有力なスポンサーであったナーンのアナンタウォラリット王（Anantaworarit）は、CS 1223［1861/62］年とCS 1225［1863/64］年に、パンニャーサ・ジャータカを10の束にコピーさせており、後者にはニッサヤも付されている。[113] ラーンナー版は豊かな地方文学、すなわち、先述したように大部分が地方語である「ラーンナー・ジャータカ」の発展を促した。[114]

パンニャーサ・ジャータカの写本は、北部の以下のような寺院に保持されている。

ワット・ムァンモー寺院（Wat Muang Mo）、プレー県、Rong Kwang 地区
ワット・プラルアン寺院（Wat Phra Luang）、プレー県、Sung Men 地区
ワット・トゥレン寺院（Wat Tou Leng）、ナーン県、Pua 地区
ワット・クラン寺院（Wat Klang）、プレー県、Song 地区
ワット・パムエ寺院（Wat Pa Muet）、ナーン県、Pua 地区
ワット・ピャプ寺院（Wat Phya Phu）、ナーン県、Muang 地区
ワット・チャンカン寺院（Wat Chang Khan）、ナン県、Muang 地区[115]

しかしながら、それらのいずれもが完全ではない。唯一の完全な写本は、プレー県の Amphoe Sung Men のワット・スンメン寺院（Wat Sung Men）のものだけである。

ワット・スンメン写本は、完全なもので9巻（mat）あり、CS 1196（BE 2377＝CE 1834）年とCS 1198（BE 2379＝1836）年の間に書写されている。これは近年、中央タイの文字で出版されている。[116] この集成には50のジャータカと、さらに補遺として6つとが含まれている。

最後のコロフォンは、ラーンナー・タイ語の語釈を伴うパーリ語で、次のように書かれている。（p. 987）

> Kukkurajātakaṃ（クックラ・ジャータカ）patamānaṃ（位置している）paññāsajātake（50のジャータカの中に）paññāsajātakaṃ（50のジャータカが）samattaṃ 終わる

50話のタイトルは、その順序と内容において、フィノー（Finot 1917, pp. 45-46）によって報告された「ルアン・プラバン」写本に類似しているが、完全には一

致しない。[117] これにはそれなりの理由がある。ワット・スンメン写本はルアン・プラバンのワット・ウィスン寺院（Wat Wisun）において、プレーの林住僧（Araññavāsi）であるマハーカンチャナ（Mahākāñcana）長老の要請によって書写された。彼は、近接する国々を聖典の写本を収集するために弟子達と遊行したのである。ドゥラー比丘（Thula [Dhulā] Bhikkhu）とスリーヴィジャイヤ比丘（Srīvijaiya Bhikkhu）という、写経僧のうちの２人の名が記録されている。

この版には、他の物語と混じり合いながら、古典ジャータカの集成からの13話と、ダンマパダの註釈からの一話（タイトルにはジャータカとは全く書かれていないが）、すなわち「ティッサ長老物語」（Tissathera-vatthu）とが含まれている。[118]

『チェンマイ・ジャータカ（Zimmè Jātaka）』（これについては後に触れる）とは異なり、この集成は章（vagga）に章分けされていない。しかしながら、時に見られる個々のジャータカのコロフォンは以前の kaṇḍa と vagga への章分けの痕跡を示している。

No. 7	Candaghāta	Viriyakaṇḍo paṭhamo
No. 11	Magha	Mettāya kaṇḍo ... dutiyo
No. 14	Sonanda	Nekkhammakaṇḍo ... dutiyo
App. No. 5	Duṭṭharāja	Khantikaṇḍo ... chaṭṭho
No. 23	Campeyya	Sīlavaggo ... pañcamo

もしも、Mettāya を Mettā（慈）に修正するならば、４つの kaṇḍa と１つの vagga には、すべて、波羅蜜（pāramī）の名前（精進、慈、出離、忍辱、戒）が与えられている。このことは、これらの物語が、ちょうどパーリ語の『チャリヤー・ピタカ』（Cariyā-piṭaka）や先述の『六度集経』のように、かつては、それらが説く諸波羅蜜にしたがって分類されていたであろうということを示している。最後のパーリ語の数字（paṭhama, dutiya など）は、おそらく、その章のものではなくて、その章に含まれた物語の番号である。すなわち、たとえば、「ソーナンダ（Sonanda）・ジャータカ」は、出離（Nekkhamma）についての章の第２ジャータカであったのである。しかしながら、波羅蜜の順序は伝統的なものとはかなり異なっており、これらの章がいかなるものであったのかについては、全く不明である。これらの名前は、他の手本から書写するときに、持

ち越されたものであるかもしれない。おそらくは、さらなる手がかりが、他の寺院の不完全な集成の中に見いだすことができるであろう。

54話のジャータカのうちの25話の末尾には、連続した番号が付されている。残りの31話には番号はない。[119] 番号のあるものについても、その番号が常に実際の集成の番号と同じというわけではなく、一つかそれ以上ずれている。たとえば、第11話にはdvādasama, 12という番号が付されている。第14，15，16，17，18，および21話には、それぞれ末尾に15，16，17，18，19，22という番号が見られる。[120] このことは、書写のある段階で順序が変更されたことを示唆するものである。

各ジャータカの「現在事」（paccuppannavatthu）の場所のリストが、刊本の序文に記されている。[121] その場所は伝統的なものである。すなわち、47話が祇園精舎（Jetavana）で、3話がニグローダ園（Nigrodhārāma）で、そして1話が竹林精舎（Veḷuvana）で始められる。文体は、その大部分がニッサヤ（タイ・ユアン語による翻訳あるいは語釈を伴うパーリ文）で、一部がヴォーハーラ（ニッサヤよりはパーリ語が少なく、断続的にパーリの語句を挙げる）。[122] いくつかの偈文は完全にパーリ語で提示されている。地方語としては、タイ・ユアン語が用いられているが、いくつかのケースではラオ語が用いられているが、2つの文化の間には密接な関係が認められる。

他の地方語による集成

ニヤダは、ランナーと歴史的、文化的に深く結びついている古い都市であるチャン・トゥン（Chiang Tung / Kengtung, Shan 州、ビルマ）のパンニャーサ・ジャータカの内容について記録している。チャン・トゥンのワット・ミン寺院（Wat Min）の院長であるティプ・チュトゥハンモ師（Thip Chutuhammo）が、Paññāsa-jāti という名の写本を保持しており、師は、パンニャーサ・ジャータカは、チャン・トゥンにおいてはずっと長い間人気があり、物語は説法と関係しているということを伝えている。ニヤダによって記録される集成は、26のセクション（kaṇḍa）に分割されている。[123]

タイ国の北東部とか南部といった他の地域あるいは地方語において、特有のパンニャーサ・ジャータカ集が、まとめられたり、伝承されたりしていたかは不明である。phra chao ha sip chat（50の生涯）という術語は確かに知られて

いるし、個々のジャータカは地方文学の中に伝えられている。たとえば、北東部では、「タウ・スィトン（Thau Siton）」（スダナ・ジャータカ）、「タウ・スパミット（Thau Suphamit）」（スバミッタ・ジャータカ）、「タウ・ソワート（Thau Sowat）」（スバトラ・ジャータカ）は、地方語のヴァージョンで存在している。[124] 一方、南部では「ラトートメーリ（Ratotmeri）」や他のジャータカの地方語ヴァージョンが存在している。至る所に姿を現す「スバンナサンカ」（サン・トン）（Suvaṇṇasaṅkha / Sang thong）は、北東部、南部で地方語ヴァージョンが知られている。[125] しかしながら、「パンニャーサ・ジャータカ」というようなものは知られていないのである。

同じ事はおそらくモンのヴァージョンにもいえるであろう。個々のジャータカと偈文の翻案もの――「サムダゴーサ」（Samudaghosa）や「ヴァラヴァルナ」（Varavarṇa）や他の物語――がモンに存在する一方で、管見の及ぶ限りでは、モンのジャータカ集に対する言及はない。これらのことすべてにさらなる研究が必要である。

2. ラオスにおけるパンニャーサ・ジャータカ

ラオスからは、我々は2つのことなる地方語の写本についての情報が得られる。一つはルアン・プラバン、もう一つはヴィエンチャンのものである。ラオスにおけるパンニャーサ・ジャータカの研究については、フィノーとアンリ・デディエの先駆的な研究に負うところが大きい。後者には、出版された著作と、現在ジャクリーン・フィリオザ（Jacqueline Filliozat）とアナトール―ロジャー・ペルティエ（Anatole-Roger Peltier）によって、「ラオスのパンニャーサ・ジャータカの未知の断片」（Un fragment inconnu du Paññāsa-jātaka laotien）というタイトルの下に出版準備されている、50の物語の要約を含む未出版の著作との2つの研究がある。[126]

フィノーはラオスの北部、ルアン・プラバンの「王都」の集成について報告しているが、それを「フィノーのリスト」と呼ぶことにしておく。刊本であるPhra Chao Sip Chat は、仏教学研究所の委員会（Committee of the Institute for Buddhist Studies / Khana kammakar pracham sathaban kan suksa phutthasasana）によってヴィエンチャンにおいて出版されたのであるが、内容

の点では、フィノーのリストとワット・スンメン寺院の集成とにきっちりと一致している。[127] この版を「仏教学研究所（Institute for Buddhist Studies）版」と呼ぶことにしておく。[128] フィノーのリストやワット・スンメン寺院のパンニャーサ・ジャータカと同じく、仏教学研究所の集成にも古典ジャータカ集からのジャータカ（デディエによれば14話）が含まれている。デディエは、ラオの集成の50話のうち、27話は他の集成には見られない（“Ces 27 récits sont absolument originaux”）と注記している。[129]

仏教学研究所版の序文には次のように記されている。

> Phra Chao Ha Sip Chat（50の生涯）はすばらしい物語〔の集成〕である。昔の人々は、これを聴聞していたのである。職業的な芸人と演奏家（mo lam ruang）とが朗詠し、定期的に聴聞されていた。家庭で読まれるように多くの貝葉写本も存在していた。[130]

近刊の論文において、デディエは、ヴィエンチャンのワット・プラケォ寺院（Wat Phra Kaew）の書庫にある、不完全な“Ha sip chat”（50の生涯）の写本について報告している。その写本は11の物語（最後のものは不完全である）を含む9束の写本である。内的な根拠に基づき、デディエはこれらがある集成の第39話から49話に相当すると結論づけている。非常に異なった順番ではあるが、3話のみがバンコックの国立図書館版に一致する。内容と順序の点で、この集成はフィノーのものと仏教学研究所のものとは、あるいはワット・スンメン寺院の集成とは、あるいはまた、仏教学研究所や『チェンマイ50話』（Zimmmè Paṇṇāsa）の集成とは類似していない。実際、11話のうちのいくつかは、他のいかなる集成のうちに見いだすことのできないものである。

ヴィエンチャンのラオス国立図書館にはパンニャーサ・ジャータカ写本が収められている。[131] しかしそれらの内容については、私の知る限り、これまで分析されてはいない。さしあたっては、ラオスがパンニャーサ・ジャータカの豊かな伝統を共有しているということが言えるのみである。[132]

3. カンボジアにおけるパンニャーサ・ジャータカ

パーリ語のパンニャーサ・ジャータカ写本は、カンボジアにも存在している

が、クメールとシャム—パーリの集成との間の関係は、徹底した研究がなされていないので、不明である。クメール文字のパーリ語写本の集成の内容を記したフィノーのリストは、バンコックの国立図書館版と他の入手可能な諸集成のものとは異なっている。[133] テラルの研究（1956）はクメール文字の「サムッダゴーサ・ジャータカ」（Samuddaghosa-jātaka）は、『チェンマイ50話』（Zimmè Paṇṇāsa）のヴァージョンとは根本的に異なっていることを示している。[134] しかしながら、それらの写本の一つ(K3)はカンボジアで書写されているものの、その写本や他の写本が、カンボジア起源であるのか、シャム起源であるのかははっきりしていない。一つの写本（K4）は表紙フォリオにシャム文字の書体がある。プノン・ペンの国立図書館には、今日 Paññāsa-jātaka “ban ton”（パンニャーサ・ジャータカ「前半」）が17束で収められているが、[135] それはほぼ間違いなくシャムからきたものである。

25話のジャータカがプノンペンの仏教学研究所（Institut bouddhique）によって1953年から1962年にかけて５分冊で出版されている（内容については Table III 参照）。[136] 同じ25話のクメール語訳はそれとは別に1944年から1962年にかけて『パンニャーサジャータク・サムラーイ』（Paññāsa jātak samrāy）というタイトルで同じく５分冊で出版されている。[137] どちらも出版は25話で止まっている。1963年に、ノック・テーム（Nhok Thèm）による50話すべてのクメール語の要約版が、プノンペン大学の文学・人間科学部から『要約パンニャーサ・ジャータカ』（Paññāsajātak saṅkhep）というタイトルで出版されている（内容については Table IV 参照）。[138] 最初の20話のタイトルは、仏教学研究所版と同じであり、順序も同一である。最初の35話のタイトルは、タイ国立図書館版と同じであり、順序も同一であるが、それ以降の順序とタイトルは異なっている。[139]

非古典ジャータカは大衆的偈文学として翻案されてきた。これらの物語の中のいくつかはオーギュスト・パヴィエの『カンボジアの小話』（Contes du Cambodge）に見られる。[140] パヴィエは「ボルボン（Varavong）とソウリボン（Saurivong）」を全訳して、「カンボジアの最も愛されている風俗・冒険小説」であると記している。

ジュディス・ジェイコブスによって『カンボジアの伝統文学』（Traditional Literature of Cambodia）において要約されている多くの物語が、非古典ジャータカのものであり、諸パンニャーサ・ジャータカ集にもしばしば含まれてい

るものである。[141]

4. ビルマにおけるパンニャーサ・ジャータカ

ビルマには50話すべてが揃い、それぞれ10話ずつ５つの章（vagga）に整理された、パーリ語のパンニャーサ・ジャータカが伝播した。[142] きちんと章立てられ、50話きっかりからなるのはこの集成のみである。ジャイニによれば、ビルマにおいては、パンニャーサ・ジャータカの貝葉写本はまれである。[143] ジャイニは、彼のエディションをまとめるのに、モーニュウェー（マンダレーの近くのモーニュウェー（Monywa）地区）のジェータウン（Zetawun / Jetavana）僧院の324葉よりなる完全な写本と、ラングーンのハンタワッディー出版（Hanthawaddy Press）によって1911年に出版されたビルマ文字による刊本（685ページ）という２つの原典を用いた。ハンタワッディー版には、編集者や使用した写本についての情報は何も記されていない。[144] この本が1981年と1983年にパーリテキスト協会（Pali Text Society）から二巻本で出版された P. S. ジャイニのローマ字本[145]の底本となっており、それにはホーナーとジャイニによる英訳[146]も得られる。ハンタワッディー版は最近タイ語に翻訳されている。[147]

この集成はビルマでは「チェンマイ・ジャータカ」として知られており、ハンタワッディーによる出版にもこのタイトル（Zimmè Jātaka）が付されている。しかしながらこれは、「ユアンの50話」“Yuan Paṇṇāsa” というもう一つの俗称と同じように、通称なのである。これ以外の、もっと正式な名称というのはあるのであろうか？ 最後のコロフォンには Paṇṇāsa jāt（写本）、Paṇṇāsa pāḷi（出版本）とある。ジャイニによって出版された本の各章（vagga）の終わりのコロフォンは、章のタイトル（それは章の最初の物語のタイトルに過ぎないのであるが）と10話のタイトルを列挙する摂頌（uddāna）に、次のような散文を加えたものである。

> iti imehi dasajātakehi paṭimaṇḍito paññāsajātakasaṅgahe vijamāno [x]-vaggo ... niṭṭhito.
>
> 以上でこれら10話のジャータカによって装飾された、パンニャーサ・ジャータカ・サングラハに存在している××章が終わる。

章（vagga）のコロフォンに付されたタイトルである『パンニャーサ・ジャータカ・サングラハ』というのが、このテキストのもともとの名称なのであろうか？換言するならば、この「ビルマの集成」の著者あるいは編者は、単に「パンニャーサ・ジャータカ」と呼ばれる他の集成と区別するために、彼自身によって編集され、章に整理された、外典のパーリ語ジャータカの、ある特定の集成であることを示すものとして、彼の作品を『パンニャーサ・ジャータカ・サングラハ』と名付けたのであろうか？　このタイトルは、ジャイニの用いた2つの原典のすべてのコロフォンに一貫するものではないのだから、そして、末尾のコロフォンに確認できるものではないのだから、答えを出すまでには、さらなる写本が調査される必要があるであろう。

1888年にマンダレーの宮廷図書館(1885年の英国の併合によって分散してしまったが）の最後の王立図書館員であったウ・ヤン（Maṅ krī Mahāsirijeyasū, 1815-1891）が著した『ピタカット・サムイン』（Piṭakat samuiṅ）というタイトル目録は『パンニャーサ・ジャータカ・サングラハ』という名称を使わず、『ローキー・パンナーサ・ジャート』、（Lokīpaṇṇāsa-jāt）という別のタイトルでリストアップしている。『ピタカット・サムイン』はこのタイトルの下にパーリ語のものとニッサヤとの2つの書物を挙げている。[148]

> § 369.　Lokīpaṇṇāsa-jāt : Yui:dayā（タイ国）の Ayuddhaya（アユタヤ）地方の Jaṅ: may（チェンマイ）に住んでいた、仏法と世間法とに大変通暁した rhaṅ sāmaṇera によって著されたもの。
>
> § 898. Lokīpaṇṇāsajāt-nisya: アマラプラの最初の都を作った最初の王の治世（amarapūra paṭhama mrui taññ nan: taññ ma:）において Ku gyi Sayadaw（gū krī charā-tō）によって著された。このニッサヤは三巻よりなる。

この王は、1783年5月に都をアマラプラに遷したボーダワパヤ王（Bodawapaya)であるはずである。[149] ビルマ語訳のある部分を含む貝葉写本が、バンコックにあるパーリ貝葉断片研究所（Fragile Palm Leaves）に所蔵されているが、それにも『ローキー・パンナーサ』というタイトルが付されている。その写本には、第2章「スダヌの巻」（Sudhanuvagga）の中の物語が、『チェンマイ50話』（Zimmè Paṇṇāsa）と同じ順序で収められている。翻訳者の名前と翻訳

の年月日は知られていない。ウ・ヤンおよび、そのビルマ語の写本に基づけば、その作品のもう一つのタイトルは『ローキー・パンナーサ・ジャート』であることになろう。[150] しかしながら、このタイトルはパーリ語バージョンのどこにも見られないものである。これは、ニッサヤの著者あるいは初期の翻訳者によって最初に与えられたものであるということはあり得ないだろうか？

『チェンマイ50話』の内容および物語の配列は、国立図書館やワット・スンメン版といった他のこれまで知られている諸集成とは異なっている。先に述べたように偈文でさえも異なっていることが多い。これまでのところ、この『チェンマイ50話』という集成はビルマにのみ知られており、これに相当する写本類はパーリ語であれ、地方語であれ、ラーンナーやその他の地域には存在していない。しかしながら、CS 1181（BE 2367＝CE 1824）年に書かれた北タイ語の経典目録『ピタカ・マーラー』（Piṭakamālā）は、『チェンマイ50話』と内容および構成の点で（しばしば見られるように綴り字とタイトルの細部の差異はあるものの）一致する、５つの章の“50 chat”（50ジャータカ）について記録している。現在まで、これが、ラーンナーそのものにおける唯一の『チェンマイ50話』の痕跡となっている。

『ピタカ・マーラー』による言及はパンニャーサ・ジャータカをチェンマイと関連づけるビルマの伝統の確証であると解釈し得るであろうか？　その集成は、おそらくビルマによる長い支配の間(1588-1775)に、むしろビルマからチェンマイに伝わっていったのであって、その逆ではないのだから、それはありえない。結局のところ、ワット・スンメン寺院のパンニャーサ・ジャータカの出版本の序文に注記されているように、『ピタカ・マーラー』はジャイニの用いたワット・ジェータヴァナ寺院（Wat Jetavana）の写本（それには1808年に相当する年代が記録されている)の17年後に書かれている。この言及が我々に伝えているのは、その集成が『ピタカ・マーラー』の未確認の著者によって知られていた、ということだけなのである。

それでは、いったいチェンマイ起源だという伝承には何か真実が含まれているのであろうか？　その可能性はあるが、証明は不可能である。ともかくも、その伝承は『チェンマイ50話』、あるいは、（いわゆる）『パンニャーサ・ジャータカ・サングラハ』のみに適用されるものである。他の諸集成に対して、このような伝承は、シャムにも、ラオスにも、カンボジアにも伝わっていないし、も

し、このようにいくつもの言語によって広く分岐した諸集成が、すべて一人の僧によってチェンマイで著されたとしたら、それは実際奇妙である。

『チェンマイ50話』の成立年代は知られていない。年代の上限はニッサヤの年代、すなわちそれはボーダワパヤ王（Bodawpaya）の治世において著されているので、1783年から1826年の間となる。新しい情報の発見につながるかもしれないので、ニッサヤを含むビルマ語の原典のさらなる調査が必要である。別の疑問点として、ビルマに他の集成が存在したかどうかということがある。

ダムロン王子のパンニャーサ・ジャータカについての記述は、多少長くなるが引用する価値がある。

> パンニャーサ・ジャータカがかつてビルマにまで伝播したとき、ビルマ人たちは、それを「チェンマイ・ジャータカ」と呼んだ、という報告がある。しかし、ビルマの王はそれが偽経（teng plom phra phutthawacana）であると宣言し、焼き捨てるように命じた。この結果ビルマにはパンニャーサ・ジャータカの写しは存在していない。[151]
>
> その王はパンニャーサ・ジャータカをブッダに帰された偽経的な教えであると述べている。というのは、王は、ニパータ・ジャータカ（Nipāta-jātaka）（あるいは我々がタイ語で「550話の尊者の物語」と呼ぶもの）を、実際にはそうではないにも関わらず、ブッダの言葉であると考えていたからである。この問題の真実は、プラバット・ソムデート・プラ・チュラ・チョム・クラオ（Phrabat Somdet Phra Chula Chom Klao）王（ラーマ５世）によって、第５代の治世において出版されたニパータ・ジャータカの〔タイ語訳の〕序文において説明されているようであった。ニパータ・ジャータカの様々な物語はおそらくブッダの時代のはるか前から一般に読まれてきた寓話である[と彼は書いている]。仏世尊は、導かれるべき(venaiyasatva)人々に教えるとき、それらの物語を、彼の説法におけるある特定の焦点を例示するために選びだしたのである。物語の中に主人公と悪玉とが登場するのは自然である。模範となる登場人物は、人間か動物かであろうが、いずれにせよ、それはマハーサットヴァ（mahāsattva）と呼ばれる。ブッダの時代より後になって、ジャータカの物語におけるマハーサットヴァとは、前生における仏世尊であるという考えが起こる。さらに後になって、三蔵

がまとめられる時、編者たちは、彼ら自身の信仰にしたがって、確固とした確信を浸透させようと願った。そしてそれ故、まるで仏世尊が、このマハーサットヴァは後にブッダ自身として生まれ、他の人々や動物は、現在の（すなわちブッダの時代の）これこれの人々である、と明確に説明したかのように、「ジャータカの登場人物の同定」（prachum　chadok＝パーリ語 samodhāna）を書いたのである。このことは、ニパータ・ジャータカに見られるジャータカ物語の構造の起源を説明したものである。チェンマイのサンガのメンバーが、その地方の物語に取材してジャータカを作ったとき、彼らは、尊敬する註釈者たち（phra gantharacanācārya）によって昔に書かれた古代の文学というモデルに単純に従ったに過ぎない。――彼らは、これがブッダの言葉であると言って誰かを欺こうという、いかなる意図をも持っていなかったのである。ビルマの王はこのことを誤解したのである。

残された課題：起源、正統性、成立年代、編纂場所

どうしてパンニャーサ・ジャータカの物語および諸集成は、東南アジアの大陸部中に広がるほどの人気があったのであろうか？　それは、すばらしい物語は別にして、いったい何を提示しているのであろうか？　いくつかの答えを思い浮かべることができる。古典ジャータカの物語と同じように、それらの物語は、道徳的な教示と、アーニサンサ（ānisaṃsa）すなわち、布施（dāna）や持戒（sīla）などの宗教的修行や行為から生じる功徳の説明との両方を提示する説法（desanā）として機能し得た。それらの物語は、また、ボーディサッタを讃歎している。すなわち、それらは、東南アジアの仏教の顕著な特徴である「テーラヴァーダのボーディサッタ崇拝集団」による文学表現なのである。そこにおいてはボーディサッタは模範として、民衆の知恵の伝達者として、聖別者として、力と六波羅蜜の行（pāramī）の具現者として機能している。

起源の問題は複雑である。先に見たように、ビルマの伝統はパンニャーサ・ジャータカをチェンマイと関連させている。この伝承の古さも源泉も明らかではない。ある時期ダムロン王子は、この集成がラオスのヴィエンチャンから来たものと考えていたが、後にはチェンマイから来たと考えていた。ニヤダはパンニャーサ・ジャータカがハリプンチャイ（ランプーン）に源を発すると示唆し

ているが、全体としてチェンマイとの関連は、広く、また無批判的に受け入れられてきている。すなわち、それはダムロン王子によって序文に記されているし、ビルマの集成に対する最近のタイ語訳にもタイトルとして使われていさえする。チェンマイであれ、他の場所であれ、個々のジャータカがある一つの場所を起源とするということはあり得ない。スダナ、スルーパ、カナカヴァンナラージャは、『ディヴヤ・アヴァダーナ』および『アヴァダーナ・シャタカ』の中にパラレルな物語がサンスクリット語で得られる。[152] 他のものは地方のどこかに源があるであろう。いくつかのものは土着化されたものであるが、このことは、それらの歴史について物語りはするが、それらの起源について（必ずしも）何ら物語るものではない。たとえば、タイ国南部のスラット・タニ（Surat Thani）においては、ヴォラヴォンは、チャイヤと関係づけられており、その出来事は近くで起こったと信じられている。[153]『チェンマイ50話』のような諸々の集成の中の一つが、チェンマイで編纂された、ということならばあり得るであろうが、それらのすべてなどということはありえない。

“パンニャーサ・ジャータカ”の年代については、ダムロン王子の時代までにいろいろな説が提示されていた。王子は、国立図書館のパーリ語の集成の年代として、2000-2200 BE（CE 1457-1657）年、という説を提示している。プラ・クル・アリヤサッター・ジム・スン・サッダルマ・パンニャー・アーチャールヤ（Phra Khru Ariyasatthā Jhim Sun Saddharrmapaññācārya）は、仏教学研究所版の序文でこの説に従っている。ジャイニは『チェンマイ50話』の年代について13—14世紀という説を提案している。フィックルは、それまでの理論を吟味して、次のように結論づけている。

> いかなる年代も単に便宜上のものでしかあり得ないことを承知した上で、このテキストにティローカ王（Tiloka）と、ムアンケオ王（Muang Keo）の治世（A.D. 1442-1525）という年代を当てはめておこう。ジャワとパガンにおける、より早い時代の遺物に、これらの物語が見られるという事実は、パンニャーサ・ジャータカ諸集成の作成よりも前に、いくつかの物語のいくつものヴァージョンが、東南アジアに流布していたことを示している。[154]

ニヤダは、後述するタウ・クタ・タムティ寺院（Thawkuthathamuti）あるいはクサ・サムティ（Kusa-samuti）寺院の碑文の年代である BE 1808（CE 1265）

年以前であると考えている。タイ語の古典詩は、いくつかのジャータカに言及している。『カムスゥァン・クロン・ダン』(Kamsuan khlong dan) には、「サムッタコート」(Samuttakhot) と「スダヌ」(Sudhanu) が、『ドヴァーダサ・マーサ』(Dvādasamāsa) には「サムッタコート」と「スダヌ」と「パーチッタ・クマーラ」(Pācittakumāra) が、BE 2060 (CE 1517) 年に書かれた『ニラット・ハリブンジャヤ』(Nirat Haribhuñjaya) には「ラタセーナ」(Rathasena) と「スダヌ」と「サムダゴーサ」(Samudaghosa) が触れられている。[155] 詩人たちは愛する人々の別離の悲しみを、当該の物語において登場人物が経験する別離の悲しみにたとえているのである。

ワット・スンメン寺院の書庫には、プラ・ラタナパンニャー (Phra Ratanapaññā) によってパーリ語からタイ・ユアン語に翻訳された「サムダゴーサ・ジャータカ」(Samudaghosa-jātaka) が存在している。[156] もしこれが、およそ1528年に完成した『ジナカーラマーリー』(Jinakālamālī) を著したのと同じラタナパンニャーであるとするならば、これはパーリ語からの翻訳として年代決定可能な珍しい例となる。しかしながら、ラタナパンニャーなる人物は数人いたかもしれず、したがってこの同一視は、仮のものに過ぎない。『チェンマイ年代記』には、CE 1288/89年にマハーカッサパ (Mahākassapa) という名前の大長老が、マングライ王 (Mangrai) に「ヴァッタアングリ・ジャータカ」(Vaṭṭaṅgulijātaka) (『チェンマイ50話』no. 37, バンコック国立図書館版 no. 20) に基づく説法をしたということが述べられる。[157] 同じことが、北部の年代記 (Phongsawadan Yonok) にも述べられる。[158] 問題となっているセクションは、古い源泉に基づいてはいるものの、『チェンマイ年代記』は、19世紀初め以降のものである。北部の年代記は、同様に古い資料に基づいてはいるものの、さらに遅く、19世紀後半以降のものである。

早い時期からいくつかの物語はビルマにおいて知られていた。プゥザウ (Pwazaw) (パガンの南西約4マイル) のタウ・クタ・タムティ寺院の、627 (BE 1808＝CE 1265) 年の碑文には、「今世においてトンバメイク王 (Thombameik) が妻や王子と別離したように、彼が彼の愛する妻や息子と別離するように」という呪詛が見られる。フィックルが注記しているように「『トンバメイク』というのは、すべての諸パンニャーサ・ジャータカ集に見られる物語の主人公である『スバミトラ／スンバミッタ』(Subhamitta) (『チェンマイ50話』no. 5, バンコ

ック国立図書館版 no. 9）のビルマ訳であって、妻や子供たちからの主人公の別離がその物語の山場となっている[159]」。15世紀のビルマにおいては、別の２つの物語が知られていた。BE 2023年から2044年（CE 1480-1501）に活動したシン・アッガ（Shin Agga）が、スダナとスダヌの物語を彼の『タンフミャ・ピィツァン・ピョー』（Thanhmya Pyitsan Pyo）において翻案しているのがそれである[160]。

一般的にいって、場所と年代についての議論は、いくつかの根本的な事実を無視してきた。先に見たように、一つの『パンニャーサ・ジャータカ』などというものは存在せず、存在しているのは別々の言葉によるいくつもの別々の諸集成であるということである。作成の年代と場所についての問題は、それ故それぞれの集成ごとに異なったものとなる。すなわち、いつ、どこで『チェンマイ50話』は編纂されたのか？　バンコック国立図書館の集成はいつのものであるのか？　ワット・スンメン寺院の集成や、フィノーのリストに挙げられた諸集成や、仏教学研究所版や、あるいは、デディエのヴァージョンが基づいたものは、いつ、どこで編纂されたのであろうか？　クメール語やタイ・クーン語などのものは、いつ、どこで編纂されたのであろうか、という具合にである。

あらかじめ存在する答えを与えてくれるような、古い文献は存在していない。中央シャムの文学の中では、先述した『トライブーミ・ヴィニッチャヤ・カター』（Traibhūmilokavinicchayakathā）が、その集成に対する最も古い言及であるように思われる。ビルマの場合は、おおざっぱにせよその集成に対する最も古い年代のわかる言及は、『ローキー・パンニャーサ・ジャート』（Lokī-paṇṇāsajāt）のニッサヤに対するものであった。どちらの言及も18世紀の終わりという年代を与えている。いくつかのジャータカに対する文献的な、あるいは碑文上の根拠が存在してはいるが、集成に対する古い時代の証拠はない。すなわち、その構成要素の年代に関わらず、集成の年代は遅いものであろう。しかしながら、このことも証明できてはいない。

これらの諸パンニャーサ・ジャータカ集成は、オリジナルな単一の著作ではあり得ない（ビルマのパーリ語版は例外である可能性もあるが）。それらは、集成、選集、全集、名話選なのである。それぞれの物語が、それぞれの歴史を持っている。いくつかは、おそらくあるいは確かに、古い時代のものである。スダナなどのいくつかの話はインド起源のものであり、それらはおそらくは、テーラヴァーダ以外の部派の、そしてまた大乗仏教の文献がその地域に流布した、ド

ヴァーラヴァティーや扶南といった古い時代の遺物でさえあろう。

重要なポイントとして、碑文や年代決定可能な文献における個々のジャータカのタイトルやその中の登場人物や出来事に対する言及は、いかなるパンニャーサ・ジャータカ集の年代をも証明するものではない、ということがある。それらはただ、そのジャータカあるいはジャータカのあるヴァージョンがその時代と場所において知られていた、ということを証明するに過ぎない。このような性格を持つ、重要な諸々の言及が、ニヤダによって集められており、それらは、いくつかのジャータカがパガンとスコータイにおいて知られていたということを示している。[161]

諸パンニャーサ・ジャータカ集は、東南アジアにおける外典ジャータカ文学の莫大な集積と別にしては研究できない。どのようにしてある物語が、諸パンニャーサ・ジャータカ集に含まれるようになり、他のものは含まれなかったのであろうか？　選別の原則とはいったい何であるのか？「シヴィジェーヤ」(Sivijeyya) や「ローカネーヤ」(Lokaneyya) や「ラージョーヴァーダ」(Rājovāda) や「ティナパーラ」(Tiṇapāla) といったポピュラーなジャータカが、なぜ「未収録」のままなのであろうか？[162]「シソーラ・ジャータカ」(Sisorajātaka) は、そのコロフォンによればパンニャーサ・ジャータカからのものであるとされるが、それはこれまで知られたどの集成にも含まれていない。[163]このことは、失われたか、あるいは、これから発見されるべき他の集成があることを意味しているのであろうか？　飢えた雌虎に自己を与える物語や、ボーディサッタの最後の女性としての生の物語などの、重要でよく知られた説話が、『マハーサンピンダ・ニダーナ』(Mahāsampiṇḍanidāna) や『サンバーラヴィパーカ』(Sambhāravipāka) や『ソータッタキー・マハーニダーナ』(Sotatthakīmahānidāna) の冒頭に付加されながらも、ジャータカ集に含まれなかった、あるいは、独立して伝播したようであるのは、いったいなぜなのか？　なぜ50という数字が選ばれたのか？　その数字にはこれといった象徴的、秘教的、歴史的、あるいは古典的な意義は、全く存在しないように見える。

個々の物語に単一の文学的源泉を追求することには、もう一つの方法論的な問題点が存在する。我々が関わっているのは流動的で融通性のある、口承の説話文学である。同じ物語がはたらきに従って異なる外見を持つであろう。すなわち、それは、説教者、編者あるいは著者の必要性と空想力に従って、装飾さ

れたり、拡張されたり、収縮されたり、要約されたりするであろう。我々は、人々が唯一の固定した文学的な原典から物語を学習したというように考えてはならない。すなわち、彼らは、正典テキストから学んだかもしれないし、その潤色物や説法、説教、絵画、壁画から学んだかもしれないのである。

パーリ語版の起源はどうであろうか？「ローカルなパーリ語」はそれぞれどの程度異なっているのであろうか？　ダムロン王子や他の研究者は、そのパーリ語が貧弱で標準的なものではないと注記している。しかしながら、それは、物語ごとに均質ではなく、文体的特徴に対する調査は、まだ揺籃期にある。言語的には『ダサボーディサッタ・ウッデーサ』(Dasabodhisatta-uddesa) や『ローカネーヤパカラナ』(Lokaneyyapakaraṇa) や『ジャンブーパティ・スッタ』(Jambūpati-sutta) や『マハーカッサパ・ローカ・サンターナ』(Mahākappalo-kasaṇṭhāna) などのシャムの他のテキストと特徴を共有している。個々のテキストの言語についての役に立つ予備的研究が、セデス、マルティニ、テラル、ジャイニや他の研究者によってなされてきたが、包括的な研究は、課題として残っている。[164]

地方語の諸集成の年代と起源については、文献の作者も翻訳者も不明であるという、さらに大きな問題によってくるまれている。東南アジアの言語への、経典、論書、アビダルマ、注釈書、文法書の翻訳は莫大であるが、翻訳の年代や訳者の正体などは、知られているとしても、ごく希である。

パンニャーサ・ジャータカが、東南アジアに流布した唯一の説話の集成というわけではなく、まだこれから研究されるべき他の集成も存在している。諸パンニャーサ・ジャータカ集と他の集成との関係はどのようなものであろうか？このことは、集成全体として、および、個々のテキストとして、という両方の観点から、決定されるべきものである。

たとえば、『スッタ・ジャータカ・ニダーナ・アーニサンサ』(Suttajātaka-nidānānisaṃsa) は、様々な源泉から集められた、様々なパーリ語テキストの選集である。[165] 他の集成として『ソータッバマーリニー』(Sotabbamālinī)、『サンモーハ・ニダーナ』(Sammohanidāna)、『サーヴァカ・ニッバーナ』(Sāvakanibbāna)、『ビンバカ・ニッバーナ』(Bimbānibbāna)、『パラマッタ・マンガラ』(Paramatthamaṅgala) がある。同じテキストが一つ以上の集成に見られるであろう。すなわち、内容は重複しているのである。そのようなテキ

ストの間の関係は、今後の研究によって決定されるべきである。一つの集成の中のテキストのヴァージョンは、他のものの中に伝わって来たヴァージョンと同じであるであろうか？

もう一つの問題としてパンニャーサ・ジャータカの「正統性」の問題がある。この問題はダムロン王子によって、先に引用したタイ語翻訳の序文に表明されていた。パンニャーサ・ジャータカと他のローカルなテキストの正統性に対する前近代的な態度について、断言的な叙述をすることは不可能である。少なくともいくつかの、おそらくは大部分のジャータカが、そのままボーディサッタとブッダの生涯と行動の織物へと吸収されていった、ということが示唆できるだけである。非古典ジャータカや非古典的なジャンブー王(Jambūpati)やマーレーヤ長老（Phra Maleyya-thera）などの物語を描いた壁画の重要性によっても、このことが示唆される。壁画においては、それらは仏伝（主に『パタマ・サンボーディ』(Paṭhamasambodhi)に基づく)の中に完全に包摂されており、古典ジャータカと並立している。『ピタカ・マーラー』(Piṭakamālā)は、パンニャーサ・ジャータカを、「結集（saṅgāyanā）外」のものであると表明していたが、後のテーラヴァーダの文献は『ナンダ・ウパナンダ・スッタ』(Nandopananda-sutta)などの特定の文献を、それらが「結集外のもの」(saṅgītittayam anārūḷhaṃ)であっても、「仏説」であると見なしている。換言するならば、「仏説」と「三蔵」は、必ずしも同義語というわけではないのである。

もう一つの例は、非古典ジャータカが古典ジャータカとどれほど同等なものであったか、そして、テキストの効用と格付けとが、どれほど寺院の書庫の領域外に広がっていたのかを示すものとなっている。「ダンマ・ジャーター」(Dhamma-jātā)と呼ばれるラーンナーの伝統においては、人々は、自分の生まれた年月日に従って寺院にテキストを寄進することによって功徳を得られるとされる。たとえば、丑年に生まれた人は、ヴェッサンタラ・ジャータカのタイ・ユアン語の簡略版である『ヴェッサンタラ・ルアム』(Vessantara ruam)（寄進されるテキストは非常に簡略化された一束（phuk）の「説教版」である）を寄進する。生まれた月に従って寄進されるべきテキストには、「10ジャータカ」(Daśajāti）からの物語に並んで、スンバミッタ、スダヌ、パドマクマーラ(Padumakumāra)という非古典ジャータカが含まれている。[166] 同じような特定のテキストと十二支との間の関係が、カンボジアにおいても見られる。[167]

結　論

本稿において私は、ジャータカおよびパンニャーサ・ジャータカの伝統の豊穣さと複雑さを示そうと試みてきた。この分量の論文においては表面をさらうことができたのみで、多くの未解決の問題を残したままになった。この段階においては、問題を喚起することと、文学的、社会的、歴史的、機能的に可能なあらゆる局面から、オープンな視点で問題を吟味することが重要である。

物語の方が集成に先立ち、集成は遅く成立したようである。それゆえ、もはや、これこれの物語は「パンニャーサ・ジャータカからものである」とか、これこれの物語は「パンニャーサ・ジャータカに含まれていない」などと、特定せずに述べることは不可能である。「ワット・スンメン寺院のパンニャーサ・ジャータカ集に含まれる」とか「タイ国立図書館版には見られるが、『チェンマイ50話』（Zimmè Paṇṇāsa）には含まれない」というように述べるべきであろう。

結局、諸パンニャーサ・ジャータカ集に含まれる物語と、非古典ジャータカ一般とを区別することは難しくなった。実際、これまで知られている諸集成書の中に見られないテキストが、時に、それ自体に「パンニャーサ・ジャータカからものである」と記されているということがある。たとえば、ポピュラーな北東タイ語の物語である「カエル王」（Phya Khankhaak）の物語のエピローグに次のように述べられている。[168]

> これはピャ・カンカーク（Phya Khankhaak）についての実話であり、
> ブッダとなるべき人の50の生涯において
> 語り伝えられてきていたものである。読者諸兄は……

「50の生涯」という記述は、この書を1970年に準備した現代の編者であるピャ・アリヤヌワート（Phra Ariyanuwat）によってなされたものではあるが、彼は、他の物語のために見たラオ語の写本によって確かめられた伝統に従っているのである。[169] 結局、パンニャーサ・ジャータカの研究は、伝統的物語文学の研究の中にほとんど溶け込んでしまっているのであり、そして、文学研究者――ラオ語、クメール語、シャン語、クン語、タイ語、モン語、あるいはビルマ語の――と、パーリ語および仏教研究者との密接な協力を必要としているのである。

Table I

Contents of the Wat Sung Men Paññāsajātaka[170]

No.	*Title*	*Location*	*Occasion*
1.	Samuddaghosa	Jetavana	Nang Yasodharā
2.	Sudhanu	Jetavana	Victory over Māra
3.	Sudhana	Jetavana	A monk who wants to disrobe
4.	Sirasākummāra	Veḷuvana	Devadatta
5.	Sumbhamitta	Jetavana	Devadatta
6.	Suvaṇṇasaṅkha	Jetavana	Devadatta
7.	Candaghāta	Nigrodhārāma	Repaying one's father and mother
8.	Kuruṅgamigga	Jetavana	Devadatta
9.	Setapaṇḍita	Nigrodhārāma	Perfections of giving and virtue (dānasilapāramī)
10.	Tulakapaṇḍita	Jetavana	Sacrifice of one's life (jīvitadāna)
11.	Magha	——	——
12.	Ariṭṭha	Jetavana	Ariṭṭhakummāra
13.	Ratanapajjota	Jetavana	A monk who takes care of his mother
14.	Sonanda	Jetavana	Kiñcamāṇavikā
15.	Bārāṇasīrāja	Jetavana	Perfection of giving (dānapāramī)
16.	Dhammadhajja	Veḷuvana	Devadatta
17.	Dukamma	Jetavana	Testing the teachings of one's father
18.	Sabbasiddhi	Jetavana	The state of a miraculous person
19.	Paññābala	Pasāda of Yasodharā	Yasodharā's devotion to the Buddha
20.	Dadhivāhana	Jetavana	Mixing with people with bad morals
21.	Mahissa	Jetavana	A monk with much property
22.	Chaddanta	Jetavana	A young nun
23.	Campeyya	Jetavana	Uposathakamma
24.	Bahalagāvī	Jetavana	Gratitude to one's mother
25.	Kapirāja	Jetavana	Acting to benefit one's relatives (ñātatthacariyā)
26.	Narajīva	Jetavana	A monk who takes care of his mother
27.	Siddhisāra	Jetavana	Dhammacakka
28.	Kussarāja	Jetavana	A monk who wants to disrobe
29.	Bhaṇḍāgārika	Jetavana	The power of wisdom (paññābala)
30.	Sirivipulakitti	Jetavana	Caring for one's mother
31.	Suvaṇṇakummāra	Jetavana	Wisdom (paññā)
32.	Vaṭṭaka	Magadha	A forest fire
33.	Tissatheravatthu	Jetavana	Tissa bhikkhu
34.	Suttasoma	Jetavana	Aṅgulimāla bhikkhu
35.	Mahābala	Jetavana	Perfection of giving (dānapāramī)
36.	Brahmaghosa	Jetavana	The "equipment of merit" (puññasambhāra)
37.	Sādinnarāja	Jetavana	An upāsaka who keeps the precepts
38.	Siridhara	Jetavana	An upāsaka
39.	Ajittarāja	Jetavana	Renunciation (cāgadāna)

40.	Vipularāja	Jetavana	Perfection of giving (dānapāramī)
41.	Arindumma	Jetavana	Perfection of giving (*dānapāramī*)
42.	Viriyapaṇḍita	——	A past event
43.	Ādittarāja	Jetavana	Perfection of giving (*dānapāramī*)
44.	Surupparāja	Jetavana	Perfection of giving (*dānapāramī*)
45.	Suvaṇṇabrahmadatta	Jetavana	Perfection of giving (*dānapāramī*)
46.	Mahāpadummakummāra A monk who cares for his mother		Jetavana
47.	Mahāsurasena	Jetavana	Offering the eight requisites (*aṭṭhaparikhār*)
48.	Siricuḍāmaṇi	Jetavana	Perfection of giving (*dānapāramī*)
49.	Nalaka	Kosalajanapada	A sugarcane tree
50.	Kukkura	Jetavana	Acting to benefit one's relatives (*ñātatthacariyā*)
Supplementary stories			
-1.	Suvaṇṇamigga	Jetavana	A daughter of good family (*kuladhitā*)
-2.	Canda	Jetavana	Saving the lives of animals
-3.	Sarabha	Jetavana	Solutions for a crow and a worm
-4.	Porāṇakappilapurinda	Jetavana	Benefits of sponsoring a *Tipiṭaka*
-5.	Duṭṭharāja	Jetavana	Devadatta
-6.	kanakavaṇṇarāja	Jetavana	——

Table II.

171

List of stories from the classical Pāli jātaka in the Wat Sung Men Paññāsajātaka

Wat Sung Men No.	***Title***
8.	Kuruṅgamiggajātaka
11.	Maghajātaka
20.	Dadhivāhanajātaka
21.	Mahissajātaka(Devadhammajātaka)
22.	Chaddantajataka
23.	Campeyyajātaka
25.	Kapirājajātaka
28.	Kussarājajātaka
32.	Vaṭṭakajātaka
34.	Suttasomajātaka
49.	Nalakajātaka (Naḷapānajātaka)
50.	Kukakurajātaka
-1.	Suvaṇṇamiggajātaka

Table III.

List of the 25 jātakas published in five fascicles by l'Institut bouddhique, Phnom Penh.[172]

I		13	Dukkammānika-
1	Samuddaghosa	14	Mahāsurasena-
2	Sudhana	15	Suvaṇṇakumāra
3	Sudhanu	IV	
4	Ratanapajota	16	Kanakavaṇṇarāja
5	Sirivipulakitti	17	Vīriya-paṇḍita-
II		18	Dhammasoṇḍaka
6	Vipularāja	19	Sudassana-mahārāja
7	Sirīcuḍāmaṇi	20	Vaṭṭaṅgulīrāja
8	Candarāja	V	
9	Subha-mitta-	21	Sabbasiddhi
10	Sirīdhara	22	Akkharalikhitaphala
III		23	Dhammikapaṇḍita
11	Dulakapaṇḍita	24	Cāgadāna
12	Ādittarāja	25	Dhammarāja

Table IV.

List of jātakas contained in the Nhok Thèm's abridged edition, Paññāsajātaka Saṅkhep, published in one volume in 1963 by the Faculté des Lettres et des Sciences humaines of the University of Phnom Penh.[172]

1	Samuddaghosa	23	Cāgadāna
2	Sudhanakumāra	24	Dhammarāja
3	Sudhanukumāra	25	Narajīva
4	Ratanappajota	26	Surūpa
5	Sirivipulakitti	27	Mahāpaduma
6	Vipularāja	28	Bhaṇḍāgāra
7	Siricūḍāmaṇī	29	Bahulagāvī
8	Candarāja	30	Setapaṇḍita
9	Subhamitta	31	Puppharāja
10	Sirīdhara	32	Bārāṇasirāja
11	Dulakapaṇḍita	33	Brahmaghosarāja
12	Ādittarāja	34	Devarukkhakumāra
13	Dukkammānika	35	Salabha
14	Mahāsurasena	36	Sonanda
15	Suvaṇṇakumāra	37	Devanda
16	Kanakavaṇṇarāja	38	Narajīvakaṭhina
17	Viriyapaṇḍita	39	Rathasena
18	Dhammasoṇḍaka	40	Varanetta-varanuja
19	Sudassanamahārāja	41	Saṅkhapatta
20	Vattaṅgulīrāja	42	Sabbasiddhi
21	Porāṇakapilarāja	43	Siddhisāra
22	Dhammikapaṇḍita	44	Sisorarāja

45	Supinakumāra	48	Survaṅṅavaṅsa
46	Suvaṇṇakacchapa (dī 1)	49	Sūryavaṅsavaravaṅsa
47	Suvaṇṇakacchapa (dī 2)	50	Atidevarāja

日本におけるタイのパーリ語パンニャーサ・ジャータカのエディション

田辺和子　1981「Paññāsajātaka 中の Sudhana-jātaka について (I)」『仏教研究』10, pp. 99-126。

田辺和子　1983「Paññāsa-jātaka 中の Sudhana-jātaka について (II)」『仏教研究』13, pp. 105-121。

田辺和子　1985a「Paññāsajātaka 中の Sirīdhara-jātaka について」『東方』、Vol. I, (17)-(34)。

田辺和子　1985b「Paññāsajātaka 中の Samuddhaghosajātaka について」『平川彰古希記念論集』、春秋社、pp. 155-161。

田辺和子　1991「Paññāsajātaka 中の Siricūḍamaṇijātaka について」『前田惠學博士頌寿記念佛教文化學論集』、山喜房仏書林、pp. 267-274。

田辺和子　n. d.　Sirivipulakitti-jātaka (draft romanization)。

田辺和子／木下航二　1999「Paññāsa-jātaka 中の Sattadhanujātaka 訳注(1)」『仏教研究』28, pp. 3-30。

吉元信行　1999「大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本 Surūpa-jātaka」『真宗総合研究所研究紀要』16, pp. 214-224。

注（原注の和訳。ただし［　］内は訳者による補足である。）

＊　本稿は1999年12月18日に行った大谷大学における講演の原稿に加筆訂正したものである。このプロジェクトに参加するようお誘いいただいた吉元信行教授、並びに、原稿を読んで有益なコメントと訂正を提供してくれた Oskar von Hinüber, Prapod Assavavirulhakarn, Justin McDaniel, Justin Meiland, Steven Collins に謝意を表します。なお、いかなる誤謬も筆者一人が責任を負うものである。［なお、本訳の英文オリジナル Peter Skilling, "*Jātaka* and *Paññāsa-jātaka* in South-East Asia" は、多少の改訂を経て *Journal of the Pali Text Society*, Vol. xxviii に掲載される予定である。］

1　Louis Renou and Jean Filliozat, *L'Inde classique, Manuel des études indiennes*, École française d'Extrême-Orient, Hanoi, 1953, § 1967. §§ 1972, 1993も参照のこと。［『インド学大事典』第3巻、山本智教訳、金花舎、1981年、p. 29。］

2　ジャータカについては James Hastings (ed.), *Encyclopædia of Religion and Ethics*, Vol. VII, Edinburgh, 1914, pp. 491-494における M. Winternitz による項目、ならびに、M. Winternitz, *A History of Indian Literature* (tr. Ketkar & Kahn), Vol. II [Cal-

cutta, 1933] New Delhi, 1991, pp. 113-156およびK. R. Norman, *Pali Literature*, Wiesbaden, 1983, pp. 77-84; *Encyclopædia of Buddhism*, Vol. VI, Fasc. 1 (1996), pp. 2-23参照。

3 Hemacandra, *Jaina Jātakas or Lord Rshabha's Pūrvabhavas* (translated by Amūlyacharan Vidyābhūshana, revised and edited with notes and introduction by Banarsi Das Jain, The Punjab Sansk. Bk. Depot, Lahore, 1925——未見、リファレンスは田辺和子氏のご厚意による)のような例外があるかもしれないが、このような後代の作品はジャンルを形成するものではない。しかしながら、先行する仏教のジャータカ文学の研究とともに、ジャイナ文学におけるティールタンカラの過去世について研究することが求められる。

4 私は、「主潮」(mainstream) という語によって、声聞乗の「18のニカーヤ (部派)」であろうが、「大乗」という術語の範疇に入る伝統であろうが、すべての仏教の学派に共通する伝統、共有されている文化遺産を意図している。

5 さらなる類例については、Étienne Lamotte, *Histoire du bouddhisme indien des origines à l'ère Śaka*, Louvain-la-Neuve, repr. 1976, p. 725参照。

6 L. Finot (ed.), *Rāṣṭrapālaparipṛcchā, Sūtra du Mahāyāna*, repr. Mouton & Co., 's-Gravenhage, 1957, introduction pp. vi-viii, text pp. 21-27; Jacob Ensink, *The Question of Rāṣṭrapāla*, translated and annotated, Zwolle, 1952, pp. 21-28.

7 Edward Conze (tr.), *The Large Sūtra on Perfect Wisdom with the divisions of the Abhisamayālaṅkāra*, Berkeley, 1975, pp. 621-623.

8 Hisao Inagaki (tr.), *Nāgārjuna's Discourse on the Ten Stages, Daśabhūmika-vibhāṣā*, Kyoto, 1998 (Ryukoku Literature Series V), p. 158. [大正 No. 1521, Vol. 26, 44c.]

9 Inagaki, *Nāgārjuna's Discourse*, p. 152. [大正 No. 1521, Vol. 26, 43b.]

10 Étienne Lamotte (ed., tr.), *La somme du Grand Véhicule d'Asaṅga* (*Mahāyāna-saṃgraha*), repr. Université de Louvain, Institut Orientaliste, Louvain-la-Neuve, 1973, Tome I (text) p. 70, Tome II (translation) p. 217. [大正 No. 1594, Vol. 31, 146 c.]

11 Charles D. Orzech, *Politics and Transcendent Wisdom: The Scripture for Humane Kings in the Creation of Chinese Buddhism*, The Pennsylvania State University Press, University Park (Pennsylvania), pp. 264-247.

12 Lamotte, *Histoire du bouddhisme indien*, pp. 443-446.

13 Dieter Schlingloff, *Studies in the Ajanta Paintings: Identifications and Interpretations*, Ajanta Publications, Delhi, 1988, pp. 1-13, 64-72; Monika Zin, "The Oldest Painting of the Udayana Legend", *Berliner Indologische Studien*, 11/12 (1998), pp. 435-448.

14 The odore Riccardi, Jr., "Buddhism in Ancient and Early Medieval Nepal", in A.

K. Narain (ed.), *Studies in History of Buddhism*, B.R. Publishing Corporation, Delhi, 1980, p. 273, with reference to Dhanavajra Vajrācārya, Licchavikālkā Abhilekh, Kathmandu, B.S. 2030, Inscription 1.

15 *Mahāvaṃsa* XXX, 87-88, N.A. Jayawickrama (tr., ed.), *The Chronicle of the Thūpa and the Thūpavaṃsa, being a Translation and Edition of Vācissaratthera's Thūpavaṃsa*, Luzac & Co., London, 1971 (Sacred Books of the Buddhists, Vol. XXVIII), pp. 116-117 (translation), 234 (text).

16 James Legge (tr.), *A Record of Buddhistic Kingdoms, being an account by the Chinese Monk Fa-Hien of his travels in India and Ceylon (A.D. 399-414) in search of the Buddhist Books of Discipline*, [Oxford, 1886] New York, 1965, p. 106. [高僧法顕伝、大正 No. 2085, Vol. 51、p. 865ab.]

17 Léon Feer, "Les Jātakas dans les mémoires de Hiouen-Thsang", *Actes du Onzième Congrès International des Orientalistes, Paris-1897*, Première section, Langues et archélogie des pays ariens, Imprimerie Nationale, Paris, 1899, pp. 151-169; Lamotte, *Histoire du bouddhisme indien*, pp. 365-368.

18 たとえばRonald E. Emmerick, *A Guide to the Literature of Khotan*, 2nd edition, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1992 (Studia Philologica Buddhica, Occasional Paper Series III); Johan Elverskog, *Uygur Buddhist Literature*, Brepols, Turnhout, 1997 (Silk Road Studies I), pp. 32-33, 36-42; E. Benveniste, *Vessantara Jātaka: Texte Sogdien édité, traduit et commenté*, Paul Geuthner, Paris, 1946 (Mission Pelliot en Asie central série in-quarto IV)参照。

19 『六度集経』*Liu tu chi ching*, **Ṣaṭpāramitā-saṅgraha-sūtra* (Korean Tripiṭaka 206, Taishō 152, Nanjio 143).

20 Zenryū Tsukamoto, *A History of Early Chinese Buddhism from its Introduction to the Death of Hui-yüan* (translated from the Japanese by Leon Hurvits), Kodansha International Ltd., Tokyo, New York, San Francisco, Vol. 1, 1985, pp. 151-163. [塚本善隆、『中国仏教通史』第1巻、春秋社、1979年、p. 159.] 康僧会(K'ang Seng-hui)については、Robert Shih (tr.), *Biographies des moines éminents (Kao seng tchouan) de Houei-Kiao, Louvain*, 1968, pp. 20-31; Prabodh Chandra Bagchi, *Le canon bouddhique en chine*, tome 1, Paris, 1927, pp. 304-307; Nguyen Tai Thu (ed.), *History of Buddhism in Vietnam*, Hanoi, 1992, pp. 46-51; Minh Chi, Ha Van Tan, Nguyen Tai Thu, *Buddhism in Vietnam*, Hanoi, 1993, p. 13参照。

21 Édouard Chavannes, *Cinq cents contes et apologues extraits du Tripiṭaka chinois*, Tome I, repr. Paris, 1962, pp. 1-346. 物語の要旨については、introduction, pp. i-iv および Tome IV, pp. 1-16参照。*Cinq cents contes* (nos. 89-155)における第二の翻訳集は『旧雑譬喩経』(*Chiu tsa p'i yü ching*, **Saṃyuktāvadāna-sūtra: Korean Tripiṭaka* 1005, Taishō 206, Nanjio 1359) からのもので、Chavannes はそれを康僧会の翻訳で

あると考えていたが、最近の学説によればそれは疑わしいということになっている。

22 Yoshiko K. Dykstra (tr.), *Miraculous Tales of the Lotus Sutra from Ancient Japan: The Dainihonkoku Hokekyōkenki of Priest Chingen*, University of Hawaii Press, Honolulu, 1983, p. 9, n. 65.

23 Ārya Śūra の作品とその註釈（＝Peking Kanjur, Otani Reprint, Vol. 128, nos. 5650, 5651）は、*sKyes rabs so bźi ba'i rtsa 'grel bźugs so*, mTsho sṅon mi rigs dpe skrun khaṅ, 1997によって出版されており、便利である。Ārya Śūra（Otani No. 5650）と Haribhaṭṭa（Otani No. 5652）の基礎テキスト類は、*bsTan 'gyur las byuṅ ba'i skyes rabs daṅ rtogs brjob gces bsdus*, Mi rigs dpe skrun khaṅ, 1993によって出版されている。Tanjur のジャータカの部については、Tshul khrims rin chen, *bsTan 'gyur dkar chang*, Bod ljoṅs mi dmaṅs dpe skrun khaṅ, 1985, pp. 816-817参照。（チベット語資料の収集に関して不可欠であった、Franz-Karl Erhard [Kathmandu] の助力に対し、記して謝意を表します。）Haribhaṭṭa については、Michael Hahn, *Haribhaṭṭa and Gopadatta, Two Authors in the Succession of Āryaśūra: On the Rediscovery of Parts of their Jātakamālās*, Second edition, thoroughly revised and enlarged, Tokyo, The International Institute for Buddhist Studies, 1992（Studia Philologica Buddhica Occasional Paper Series I）参照。

24 F. Anton von Schiefner, *Tibetan Tales Derived from Indian Sources, translated from the Tibetan Kah Gyur* (translated from the German by W.R.S. Ralston), repr. Sri Satguru, Delhi, 1988; William Woodville Rockhill, "Tibetan Buddhist Birth-Stories: Extracts and Translations from the Kandjur", *Journal of the American Oriental Society* XVIII (1897), pp. 1-14; Jampa Losang Panglung, *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya Analysiert auf Grund der Tibetischen Übersetzung*, Reiyukai Library, Tokyo, 1981（Studia Phiolologica Buddhica, Monograph Series III）参照。

25 *bCom ldan 'das ston pa śākya thub pa'i mam thar bźugs so*, mTsho sṅon mi rigs dpe skrun khaṅ, 1997, pp. 205-506として出版されている。

26 Zhe chen 'gyur med Padma mam rgyal, *mDo las byuṅ ba'i gtam rgyud sna tshogs*, Kruṅ go'i bod kyi śes rig dpe skrun khaṅ, 1992.

27 *sKyes rabs dpag bsam 'khri śiṅ*, Si khron mi rigs dpe skrun khaṅ, 1991; tr. Deborah Black, *Leaves of the Heaven Tree: The Great Compassion of the Buddha*, Dharma Publishing, 1997. チベットにおける *Avadānakalpalatā* の歴史については、Leonard W. J. van der Kuijp, "Tibetan Belles-Lettres: The Influence of Daṇḍin and Kṣemendra", in José Ignacio Cabezón & Roger R. Jackson (ed.), *Tibetan Literature: Studies in Genre*, Snow Lion, Ithaca, 1996, pp. 401-402参照。

※ ［南海寄帰内法伝、大正 No. 2125, Vol. 54. p. 228a.］

28 Jacques Bacot, "Drimedkun: Une version tibétaine du Vessantara jātaka", *Jour-*

nal Asiatique, Sept.-Oct., 1914; "Tchrimekundan", in Jacques Bacot, *Trois mystères tibétains*, repr. 1'Asiathèque, Paris, 1987, pp. 19-131参照。(引用はp. 23より)

29 Ibid, p. 133. "Drowazangmo"については、Marion H. Duncan, *Harvest Festival Dramas of Tibet*, Orient Publishing, Hong Kong, 1955参照。ヴォルヴォンとサウリヴォンについては、*Vorvong et Sauriwong*, Séries de Culture et Civilisation Khmères, Tome 5, Institut Bouddhique, Phnom Penh, 1971参照。[この物語の日本語訳は注140の補注に挙げる文献に含まれている。] "Voravong" (Varavaṃsa) は、タイ国立図書館出版の *Paññāsajātaka* の no. 45である。Voravong の南タイ文学における位置については、*Saranukrom Watthanatham Phak tai pho so 2529*, Vol. 8, pp. 3296-3302の Udom Nuthong による該当項目を参照。

30 Michael Hahn (tr.), *Joy for the World: A Buddhist Play by Candragomin*, Dharma Publishing, Berkeley, 1987.

31 R.A. Stein, *Tibetan Civilization*, Stanford University Press, Stanford, California, 1972, p. 278.

32 Seiichi Mizuno, *Asuka Buddhist Art: Horyu-ji*, Weatherhill/Heibonsha, New York & Tokyo, 1974 (The Heibonsha Survey of Japanese Art, Vol. 4), pp. 40-52参照。

33 Museum für Ostasiatische Kunst Köln, *Im Licht des Grossen Buddha: Schätze des Tôdaiji-Tempels, Nara*, Köln, 1999, p. 194.

34 Douglas E. Mills, "Récits de genre *jātaka* dans la littérature japonaise", in Jacqueline Pigeot & Hartmut O. Rotermund (ed.) *Le Vase de béryl: Études sur le Japon et la Chine en hommage à Bernard Frank*, Éditions Philippe Picquier, Paris, 1997, pp. 161-172. 私の知る限りでは、英語での最も良い考察は、Edward Kamens, *The Three Jewels: A Study and Translation of Minamoto Tamenori's Sanbōe*, Ann Arbor, 1988 (Michigan Monograph Series in Japanese Studies No. 2), pp. 50 foll.におけるものである。『三国伝記』を14世紀のものとするのは、Mills (p. 165) によって示されているが、日本の学者は通例これを15世紀のものと考えている。

35 Thomas J. Cogan (tr.), *The Tale of the Soga Brothers*, University of Tokyo Press, Tokyo, 1987, p.86参照：燃燈仏 (Dīpaṃkara)、薩埵王子 (Sattva)、尸毘大王 (Śivi) に対する言及を含む。[『曾我物語』日本古典文学大系88、岩波書店、1966, p. 158.]

36 前者については、Hajime Nakamura, *Indian Buddhism: A Survey with Bibliographical Notes*, Kansai University of Foreign Studies, Hirakata City, 1980の pp. 46-48を、後者については、pp. 137-14を参照。

37 Piriya Krairiksh, *Buddhist Folk Tales Depicted at Chula Pathon Cedi*, Bangkok, 1974; Nandana Chutiwongs, "The Relief of Jataka (Buddha's Life Episodes) at Chula-Pathon Chedi", Silpākon 21.4 (November, 1977), pp. 28-56 (上記論文の書評、タイ語版) ; Nandana Chutiwongs, "On the Jātaka Reliefs at Cula Pathon Cetiya", *Journal of the Siam Society* 66.1 (January, 1978), pp. 133-151 (Piriya 論文の書評、

英語版).

38 Piriya Krairiksh, Śemas with Scenes from the Mahānipāta-Jātakas in the National Museum at Khon Kaen", in *Art and Archaeology in Thailand*, published by the Fine Arts Department in Commemoration of the 100th Anniversary of the National Museum, September 19, 1974. 最近発見された二つの「シーマ」石については、Arunsak Kingmanee, "Suvannakakkata-Jataka on the Bai Sema of Wat Non Sila-atwararam", *Muang Boran*, Vol. 22 No. 2, April-June 1996, pp. 133-138; Arunsak Kingmanee, "Bhuridatta-Jataka on the Carved Sema in Kalasin", *Muang Boran*, Vol. 23 No. 4, October-December 1997, pp. 104-109（これらの書誌情報に関し、Justin McDaniel に感謝します)、および Suganya Nounnard, "A Newly Found Sima Stone in the Ancient Town of Fa Daet Song Yang", *Silpakorn Journal* 45.8 (Nov.-Dec. 2000), pp. 52-74.参照。タイ語においては、その石は bai semā と呼ばれており、それゆえ英語では "sema stones"と綴られる。「チィ川流域文化」は通例、画一的なドヴァーラヴァティー文化の一部と分類されている。しかしながら、このような分類には、政治的にせよ(我々はチィ川あるいはメコン川中流域における国について何も知ってはいないのである)、文化的にせよ(文化的遺物は独特なものである)、いかなる根拠も存在しない。したがって私は、「チィ川流域文化」という表現を暫定的に使用しておく。

39 Paul Pelliot, "Le Fou-nan", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* III, 249-303, 特に pp. 257-270による。[ここではペリオの基づいた『南斉書』第58巻の記述を書き下しにして示した。]

40 もちろん経蔵自体、あるいは、*Cariyā-piṭaka* や *Apadāna* や *Buddhavaṃsa* の註釈類といった他の作品に編入されたジャータカも存在している。それらは本稿では扱わないこととする。

41 N.A. Jayawickrama, *The Inception of Discipline and the Vinaya Nidāna, being a Translation and Edition of the Bāhiranidāna of Buddhaghosa's Samantapāsādikā*, the Vinaya Commentary, Luzac & Co., London, 1962 (Sacred Books of the Buddhists Vol. XXI), p. 102, n. 6.

42 『瑜伽論　声聞地　第一瑜伽処　―サンスクリット語テキストと和訳―』、大正大学綜合佛教研究所研究叢書　第4巻、大正大学綜合佛教研究所　声聞地研究会、山喜房仏書林、1998、p. 230: *Jātakaṃ katamat / yad atītam adhvānam upādāya tatra tatra bhagavataś cyutyupapādeṣu bodhisattacaryā duṣkaracaryākhyātā / idam ucyate jātakam//*. [和訳 p. 231]

43 Kosho Yamamoto, *The Mahayana Mahaparinirvana-sutra: A Complete Translation from the Classical Chinese Language in 3 volumes*, The Karinbunko, Ube City, Volume Two, p. 361. [大正 No. 374, Vol. 12, p. 452a]

44 Oskar von Hinüber, *A Handbook of Pāli Literature*, Walter de Gruyter: Berlin &

New York, 1996, §§ 109-115参照。同じ著者による *Entstehung und Aufbau der Jātaka-Sammlung* (Studien zur Literature des Theravāda-Buddhismus I), Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 1998も参照のこと。

45　ヴェッサンタラ・ジャータカに関しては、Steven Collins, *Nirvana and other Buddhist Felicities: Utopias of the Pali imaginaire*, Cambridge University Press, 1988参照。Mahājāti のタイ語発音は「マハチャート」(Mahachat) であり、jāti はチャート (chat)、jātaka はチャードク (chadok)、deśana はテート (thet) となる。タイトルのローマナイズに関しては、*Romanization Guide for Thai Script*, The Royal Institute, Bangkok, July, 1982に従っておいた。

46　古典的研究として、G.E. Gerini's *A Retrospective View and Account of the Origin of the Thet Mahâ Ch'at Ceremony (Mahâ Jâti Desanâ) or Exposition of the Tale of the Great Birth as Performed in Siam*, [1892] repr. Sathirakoses-Nagapradipa Foundation, Bangkok, 27th May 1976がある。Phya Anuman Rajadhon, *Thet Mahā Chāt*, The Fine Arts Department, Bangkok, BE 2512 [1969] (Thai Culture New Series No. 21), repr. in Phya Anuman Rajadhon, *Essays on Thai Folklore*, Editions Duang Kamol, Bangkok, n.d., pp. 164-177; Lucien Fournereau, *Bangkok in 1892*, White Lotus Press, Bangkok, 1988 (translated by Walter E.J. Tips from *Le Tour du Monde*, Vol. 68 [1894], pp. 1-64), pp. 122-125も参照のこと。タイ語のものでは、Dhanit Yupho, *Tamnan thet mahachat*, The Prime Minister's Office, Bangkok, 2524 [1981]; Sathirakoses, "Prapheni mi ngan thet mahachat", in *Prapheni tang tang khong thai*, Bangkok, 2540, pp. 1-41; Chuan Khreuawichayachan, *Prapheni mon ti samkhan*, SAC Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Bangkok, 2543 [2000], Chap. ll ; brief note at Term Wiphakphotchanakit, *Prawatsat isan*, Third printing, Thammasat University Press, 2542 [1999], p. 567参照。(これらの書誌情報は Justin McDaniel の好意による)

47　ラオスに関しては、Marcel Zago, *Rites et cérémonies en milieu bouddhiste lao*, Rome, 1972 (Documenta Missionalia 6), pp. 290-97参照。290ページ注32に、より詳しい書誌情報がある。また、Kideng Phonkaseumsouk, "Tradition of Bounphravet in Laos", in *Sarupphon kan sammana tang wicchakan ruang watthanatham asia akhane: khwam khlai khleung nai withi chiwit*, The Fine Arts Department, Bangkok, 2540 [1997], pp. 150-158参照。

48　*Kap* というのは kāby であり、サンスクリット語の *kāvya* のことである。*chan* というのは *chand* であり、サンスクリット語の *chandas* のことである。これらの術語はタイ語の韻律に言及するものである。

49　*Sinlapawatthanatham thai*, Vol. 3, Bangkok, BE 2525 [1982], pp. 163-165.

50　たとえば、*Mahachat 6 thamat reu thet 6 ong, in Chumnum nungseu thet*, Part 1, Bangkok, Rongphim Tai, 2472参照。にぎやかなヴォーカル・スタイルで、音楽を挟

んで、あるいは音楽を伴って演じられる「説法」が、前近代における仏教の教えの中心的形式であったのみならず、前近代の物語文学の源であったことにも注意すべきである。

51 Sommai Premchit, "Palm Leaf Manuscripts and Traditional Sermon", in *Buddhism in Northern Thailand*, The 13th Conference of the World Fellowship of Buddhists, Chiang Mai, 1980, p. 83.

52 Udom Rungruangsri, *Wannakam lanna*, Chiang Mai University, Chiang Mai, Second printing, 2528 [1985], pp. 126-127.

53 Māleyya の物語については、Bonnie Pacala Brereton, *Thai Tellings of Phra Malai: Texts and Rituals concerning a Popular Buddhist Saint*, Arizona State University, Tempe, Arizona, 1995, and Collins, *Nirvana and other Buddhist Felicities* 参照。パーリ語ヴァージョンは英訳とともに *Journal of the Pali Text Society* (Vol. XVIII, 1993)において出版されている。多くの地方語版が存在している。

54 Than Thun, "History of Buddhism in Burma A.D. 1000-1300", *Journal of the Burma Research Society* LXI (Dec., 1978), pp. 85-86参照。

55 *Ānisaṃsa of the Mahāvessantara-jātaka* from Wat Nong Phaek, Tambon Nong Phaek, Amphoe Saraphee, cited in Premchit, "Palm Leaf Manuscripts and Traditional Sermon", p. 86.（いくつかの変更有り）

56 ヴェッサンタラの朗詠は、ブッダの像の奉献と何か関係があったのであろうか？ *Jinakālamālinī* (ed. A.P. Buddhadatta, The Pali Text Society, London, 1962, p. 120) には、「シンハラの像」(Sīhala-paṭimā)が CE1519年にチェンマイの Wat Pa Daeng に安置された時、*Mahāvessantara-nidāna* と *Mahāvesantara-nāma-dhammapariyāya* が最初に朗読され、後半には *Buddhavaṃsa* が朗読されたと記されている。タイにおいて儀礼中に唱えられるものとして、最後の十ジャータカの偈文による要約とそれに続く仏伝とがある。そのジャータカと仏伝とは、ボーディサッタの威光 (tejas) によって、その像に力を与えるものであるようである。

57 Dhanit Yupho, *Tamnan thet mahachat*, pp. 28-30における *Chao nai thet mahachat* 参照のこと。Chulalongkorn 王子の出家と説法については、*Phra Ratchaphongsawadan krung ratanakosin ratchakanti si*, tr. Chadin (Kanjanavanit) Flood, *The Dynastic Chronicles, Bangkok Era: The Fourth Reign, B.E. 2394-2411 (A.D. 1851-1868)*, Volume Two: Text, The Centre for East Asian Cultural Studies, Tokyo, 1966, pp. 361-364参照。第 4 代の治世においては、「大いなる布施容器と説法の儀式」の期間中、主だった寺院から来た僧侶たちが、ヴェッサンタラの13章と他の説教を五日間に渡って説法した、とされる。(Flood, op. cit., Vol. One (1965), pp. 73-76)

58 *Thotsachat kham chan*, Bangkok, 2542 [1999].

59 Padmanabh S. Jaini (ed.), *Paññāsa-jātaka or Zimme Paṇṇāsa (in the Burmese Recension)*, Vol. 1, Jātakas 1-25, London, 1981 (Pāli Text Society, Text Series No.

172), p. vi.

60 *A Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*, Chiang Mai, 2541, Introduction, p. 19.

61 Genjun H. Sasaki (ed.), *Sārasaṅgaha*, The Pali Text Society, Oxford, 1992, pp. 45-46.

62 たとえば、サムッダゴーサ・ジャータカは、偈文を含む局地的な地方語版として独立して存在しているだけではなく、既知のパンニャーサ・ジャータカ集のほとんどのものに含まれている。また、人形劇もある。

63 Khün と Lao の伝統におけるテキストの研究と翻訳については、Anatole-Roger Peltier, *Caho Bun Hlong*, Chiang Mai, 1992; *Sujavaṇṇa*, Chiang Mai, 1993; *Nang Phom Hom, "La Femme aux cheveux parfumés"*, Chiang Mai, 1995; *L'Engoulevent Blanc*, Chiang Mai, 1995; *Kalē Ok Hno: Tai Khün Classical Tale*, SAC Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Bangkok, July 1999参照。

64 Sueppong Thammachat, *Wannakhadi Chadok (Jataka Literature)*, Odeon Store, Bangkok, 2542 [1999], pp. 188-218. これらのジャータカのうちの多くは、新しく出版された *Saranukrom Watthanatham Thai* に収められている。それは、現代のタイ国の3つの地方（北部、北東部、中央部）のそれぞれに15巻ずつが充てられており、南部には18巻が充てられている。Subin に関しては *Subin samnuan kao: wannakam khong kawi chao muang nakhon si thammarat*, Nakhon Si Thammarat Teachers' College, Nakhon Si Thammarat, 2520 [1977]。南部の文学と他の地域の文学の関係については、Udom Nuthong, "Wannakam phak tai: khwam samphan kap wannakam thong thin uen"、Sukanya Succhaya (ed.), *Wannakhadi thong thin phinit*, Chulalongkorn University Press, Bangkok, 2543 [2000], pp. 77-95所収、参照。

65 Udom Rungruangsri, *Wannakam lanna*, pp. 141-143.

66 H.H. Prince Dhani Nivat, "The Rama Jataka (A Lao version of the story of Rama)", in *Collected Articles by H.H. Prince Dhani Nivat Kromamun Bidayalabh Brdhihyakorn Reprinted from the Journal of the Siam Society on the Occasion of his Eighty-Fourth Birthday*, The Siam Society, 2512/1969, Bangkok, pp. 73-90; Vo Thu Tinh, *Phra Lak Phra Lam ou le Ramayana Lao*, Éditions Vithagna, Vientiane, 1972 (Collection "Littérature Lao", volume premier); Sahai, Sachchidanand. *The Rama Jataka in Laos: A Study in the Phra Lak Phra Lam*; B.R. Pub. Corp., Delhi, 1996 (2 vols.). （未見）　ラーマの物語は、コータンにおいてはまたジャータカとして提示される。Ronald E. Emmerick, *A Guide to the Literature of Khotan*, 2nd edition, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1992 (Studia Philologica Buddhica, Occasional Paper Series III), § 19.2および"Polyandry in the Khotanese Rāmāyaṇa" (Christine Chojnacki, Jens-Uwe Hartmann and Volker M. Tschannerl (ed.), *Vividharatnakaraṇḍaka, Festgabe für Adelheid Mette*, Swisttal-Odendorf, 2000

(Indica et Tibetica 37)所収、p. 233)参照。テキストに関しては、H.W. Bailey, *Indo-Scythian Studies, being Khotanese Texts Volume III*, Cambridge, 1969, § 26, pp. 65-76参照。また、Frank E. Reynolds, *"Rāmāyaṇa, Rāma Jātaka, and Ramakien*: A Comparative Study of Hindu and Buddhist Traditions", in Paula Richman (ed.), *Many Rāmāyaṇas: The Diversity of a Narrative Tradition in South Asia*, Oxford University Press, New Delhi, pp. 50-63も参照のこと。

67　北東部の「民衆ジャータカ」については、Wajuppa Tossa, *Phya Khankhaak, The Toad King: A Translation of an Isan Fertility Myth into English Verse*, Bucknell University Press, Lewisburg, 1996参照。

68　*Jātaka* No. 159. それは *Pañcarakṣā* の中に含まれるようになった *Mahāmāyūrī-vidyā-rājñī* の中心部分を構成するものである。

69　*Jātaka* No. 514, Vol. V, v. 121.

70　*Jātaka* No. 35, *Cariyā-piṭaka* p. 31, *Jātakamālā* No. 16.

71　*Epigraphia Zeylanica* I, No. 3 (and Pl. 11); S. Paranavitana によって改訂された読みが *Epigraphia Zeylanica* III, No. 16; *Ancient Ceylon* I (January 1971), pp. 106-109にある。

72　C.E. Godakumbura, *The Koṭavehera at Dedigama*, The Department of Archæology, Colombo, 1969 (Memoirs of the Archæological Survey of Ceylon, Volume VII), pp. 40-42.

73　私のこの研究は、ダムロン王子からニヤダまでの数世代に渡るシャムの学者の仕事に、そして、Feer から Finot、Fickle までの西洋の学者に非常に負うものである。私は、私が日本語でなされた研究を正当に扱うことができず、ただ、田辺和子の先駆的な研究と吉元信行のリーダーシップの下、大谷大学におけるパンニャーサ・ジャータカ研究グループの現在のプロジェクトに言及することができるだけであることを残念に思う。

74　*nisay* という語はタイ語では様々に綴られる、すなわち *nisaya, nissaya, nisraya* などである。文献のジャンルとしては、古典パーリ文学に対してのビルマのニッサヤとは、いろいろな点で異なっている。

75　Léon Feer, "Les Jātakas", *Journal Asiatique* 7e Sér., v, 1875, pp. 417 foll.

76　Louis Finot, "Recherches sur la littérature laotienne", *Bulletin de l'École Française d'Etrême-Orient* XVII, 5.

77　Ginette Terral, "Samuddhaghosajātaka", *Bulletin de l'École Française d'Etrême-Orient* XLVIII, 1 (1956), pp. 249-351; Ginette Terral-Martini, "Les Jātaka et la littérature de l'Indochine bouddhique", in René de Berval, *Présence du bouddhisme* (*special issue of France-Asie, Revue mensuelle de culture et de synthèse*, tome XVI), pp. 483-492.

78　Henri Deydier, *Introduction à la connaissance du Laos*, Saigon, 1952, pp. 28-29.

Jean Filliozat による Deydier の追悼記事については、*Bulletin de l'École Française d' Etrême-Orient* 48 (1956), pp. 603-606参照。

79　P. Schweisguth, *Étude sur la littérature siamoise*, Imprimerie Nationale, Paris, 1951. Schweisguth は、パンニャーサ・ジャータカ一般については（pp. 318, 357において、ごく簡単にそのタイ語訳に言及する以外は）扱ってはいない。しかしながら、独立して、またパンニャーサ・ジャータカ集に含まれる形で広まっている、いくつかの人気のある物語を要約している。

80　これらのものには、膨大な写本集をカタログ化することによって得られたパンニャーサ・ジャータカのテキストの同定と、Deydier の近刊論文に対する彼女の論考の両者が含まれている。本稿「ラオスにおけるパンニャーサジャータカ」の節および注126参照。

81　Dorothy M. Fickle, *An Historical and Structural Study of the Paññāsa Jātaka*, 1979 (doctoral dissertation consulted in the Siam Society Library).

82　Padmanabh S. Jaini, "The Story of Sudhana and Manoharā: and analysis of the texts and the Borobudur reliefs", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, xxix, 3 (1966), 533-558; "The Apocryphal Jātakas of Southeast Asian Buddhism", *The Indian Journal of Buddhist Studies*, Vol. I, No. 1, 1989, pp. 22-39.

83　ダムロン王子については後述する。ニヤダに関しては、Niyada (Sarikabhuti) Lausunthorn, *Paññāsa Jātaka: Its Genesis and Significance to Thai Poetical Works* [in Thai], Bangkok, 2538 [1995] 参照。

84　たとえば、カンディーのアシギリヤのシャム写本の中の *phūk* 17は、はぐれてしまっている：Jacqueline Filliozat, "Catalogue of the Pāli Manuscript Collection in Burmese & Siamese Characters kept in the Library of Vijayasundararamaya Asgiriya: A historical *bibliotheca sacra siamica* in Kandy, Sri Lanka", *Journal of the Pali Text Society* XXI (1995), p. 151 (Asgiriya Siamese 4)参照。

85　Ginette Martini, "Les titres des jātaka dans les manuscrits pāli de la Bibliothèque Nationale de Paris", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* LI, Fasc. 1(1963), pp. 79-93参照。

86　Joel Tatelman, *The Glorious Deeds of Pūrna: A Translation and Study of the Pūrṇāvadāna*, Curzon Press, Richmond (Surrey), 2000, p. 13. タテルマンは、『仏教説話研究第一　仏教説話研究序説』、岩本裕、開明書院、1978、pp.143-148に言及している。

87　Victor H. Mair, "The Linguistic and Textual Antecedents of *The Sūtra of the Wise and Foolish*", *Sino-Platonic Papers*, Number 38, April, 1993, p. 15.

88　Donald E. Gjertson, *Miraculous Retribution: A Study and Translation of T'ang Lin's Ming-pao chi*, University of California at Berkeley, 1989 (Berkeley Buddhist Studies Series 8), pp. 101, 103.

89　Ward Geddes, *Kara Monogatari: Tales of China*, Arizona State University, 1984

(Center for Asian Studies, Occasional Paper No. 16), p. 27.

90 Yoshiko K. Dykstra (tr.), *Miraculous Tales of the Lotus Sutra from Ancient Japan: The Dainihonkoku Hokekyōkenki of Priest Chingen*, University of Hawaii Press, Honolulu, 1983, p. 9.

91 *An Historical and Structural Study*, p. 10.

92 この形式は、*Dhammapada-aṭṭhakathā* においても用いられており、同じ形式を用いるテキストは、『ウダーナ・ヴァルガ』に対する北西インドの注釈者であるプラジュニャーヴァルマンにも知られていたようである。Peter Skilling, "Theravādin Literature in Tibetan translation", *Journal of the Pali Text Society* XIX (1993), pp. 143-153参照。

93 Ginette Terral, "Samuddhaghosajātaka", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* XLVIII, 1 (1956), pp. 282-283.

94 Terral, op. cit., pp. 276-279参照：*Zimmè Paṇṇāsa* の第11-13偈は、クメール／シャムのテキストには対応するものがなく、散文になっている。

95 Padmanabh S. Jaini (ed.), *Lokaneyyappakaraṇaṃ*, The Pali Text Society, London, p. 203.

96 カンボジアのパーリ語の集成とシャムの集成との関係がどのようであるのかについては、不明なままである。*An Historical and Structural Study* の第3章において、フイックルは、二つのジャータカのローマナイズテキスト――*Kanakavaṇṇārāja* と *Dhammasoṇḍaka* ――を提示しているが、それらはそれぞれ、仏教学研究所（Institut Bouddhique）のクメール文字の出版本に基づき、国立図書館（バンコク）の一つの Khom 文字写本のマイクロフィルムと比較したものである。彼女の注で記録される異読は、マイナーで筆写上のものである。したがって、2つのジャータカの仏教学研究所の版と国立図書館の版は、テキスト上同じ伝統に属している。もしカンボジアに独立した写本の伝統があることがわかるならば、これは第3のパーリ語の伝統を作るだろう。

97 Ranjini Obeyesekere (tr.), *Jewels of the Doctrine: Stories of the Saddharma Ratnāvaliya*, State University of New York Press, Albany, 1991, Introduction 参照。

98 パーリ語文学に対する地方語の価値については、Charles Hallisey, "Roads Taken and Not Taken in the Study of Theravāda Buddhism", in Donald S. Lopez, Jr. (ed.), *Curators of the Buddha: The Study of Buddhism under Colonialism*, The University of Chicago Press, Chicago & London, 1995, pp. 31-61参照。

99 Ward Geddes, *Kara Monogatari: Tales of China*, Arizona State University, 1984 (Cener for Asian Studies, Occasional Paper No. 16), p. 45 (p. 46も参照。そこでは Geddes は、「影響と源泉とを探るという仕事は、（中略）絶望的であるように見える」と結論づけている。)

100 仏教研究の巨人 Léon Feer は、Bibliothèque National においてパンニャーサ・ジャータカを含むジャータカ写本の内容のリストを準備していたが、それは出版されないまま草稿として残った：A. Cabaton, "Papiers de Léon Feer", in *Catalogue sommaire*

des manuscrits sanscrits et pālis, 2e fascicule—manuscrits pālis, Bibliothèque Nationale, Paris, 1908, p. 175参照。

101　このリストについては、Niyada, *Paññāsa Jātaka: Its Genesis and Significance to Thai Poetical Works* [1995], Appendix ka, pp. 302-304参照。

102　*Paññāsajātaka chabap ho samut heng chat*, Sinlapabannakan Press, Bangkok, 2499: Part I, *ka-ṅa*＋1040 pp., stories 1-48; Part II, stories 49-50 plus *Pacchimabhāga*, stories 1-11, followed by *Pañcabuddhabyākaraṇa, Pañcabuddhaśakarājavarṅanā, and Ānisaṅs pha paṅsukula*, 982 pp., with alphabetical list of titles at end, pp. *ka-kha*. Santi Pakdeekham のご厚意により Part II のコピーを入手することができた。どちらの巻も入手困難である。第29話 *Bahalagāvī* の（タイ語からドイツ語への）翻訳が "The Striped Tiger Prince and Pahala, the Portly Cow", *Tai Culture*, Vol. V, No. 1 (June 2000), pp. 135-139にある。

103　内容のリストは、Fickle, *An Historical and Structural Study*, Table I, p. 16にある。

104　*Paññāsajātaka*, Part 28 (cf. Supaphan na Bangchang, *Wiwatthanakan vannakhadi sai phra suttantapidok ti taeng nai prathaet thai*, Bangkok, 2533 [1990] pp. 17-18). パーリ語の *Pañcabuddhabyākaraṇa* とフランス語訳は G. Martini, in *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient 55* (1969), pp. 125-145 ; Bruce Evans によるタイ語からの英訳およびさらなる文献については *Fragile Palm Leaves Newsletter* No. 5(May 2542/1999), pp. 8-12を参照のこと。

105　Niyada, *Paññāsa Jātaka: Its Genesis and Significance*, Appendix *kha*, pp. 305-319参照。

106　Niyada, op. cit., p. 133に引用されている。

107　Thomas John Hudak, *The Tale of Prince Samuttakote: A Buddhist Epic from Thailand*, Ohio University Monographs in International Studies, Southeast Asia Series Number 90, Athens, Ohio; "From Prose to Poetry: The Literary Development of *Samuttakote*", in Juliane Schober (ed.), *Sacred Biography in the Buddhist Traditions of South and Southeast Asia*, Honolulu:Unviersity of Hawai'i Press, 1997, pp. 218-231参照。

108　*Traibhūmilokavinicchayakathā chabap ti* 2 (*Traibhūmi chabap luang*), Vol. 1, Fine Arts Department, Bangkok, 2520, p. 249, *samdaeng wai nai samuttak hot-chadok nan wa* ...; noted by Dhanit Yupho, Introduction to *Samudraghoṣa kham chan*, 2503, *repr. in Kham nam lae bot khwam bang ruang khong Dhanit Yupho*, Bangkok, 2510, p. 79.

109　*Traibhūmilokavinicchayakathā chabap ti* 2 (*Traibhūmi chabap luang*), Vol. 1, Fine Arts Department, Bangkok, 2520, p. 453, *phra sangkhitikachan* (*saṅgītikācārya*) *wisatchana wai nai paññāsajātaka wa* .... *saṅgītikācārya* に対する言及は、Braḥyā

Dharrmaprīja にとっては、その集成が正典としての位置を占めていたことを意味しているのだろうか？それは、正典というものをどのように定義するかによるであろう。

110　*Tribhūmilokavinicchayakathā chabap ti* 2 (*Traibhūmi chabap luang*), Vol. 2, Fine Arts Department, Bangkok, 2520, p. 304.

111　Fem S. Ingersoll (tr.), *Sang Thong: A Dance-Drama from Thailand written by King Rama II & the Poets of His Court*, Charles E. Tuttle Company, Rutland Vermont & Tokyo, 1973; Prince Chula Chakrabongse (tr.), *The Story of Sangha, published in commemoration of the bi-centenary anniversary of the birth of King Rama II*, [Bangkok], 24th February, 1968参照。

112　Dhanit Yupho, *The Khōn and Lakon: Dance Dramas presented by the Department of Fine Arts*, The Department of Fine Arts, Bangkok, 1963, pp. 121-135(Sang Thong), 77-83(Manoh'rā), 85-90(Rothasen).

113　*Prachum phongsawadan* Vol. 10, Bangkok, 2507 [1964], pp. 86, 95, 96; David K. Wyatt(tr.), *The Nan Chronicle*, Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca, New York, 1994, pp. 121-122, (CS＝Culaśakarāja, the Lesser Saka Era.)

114　Udom Rungreungsri, "Wannakam chadok ti mi laksana pen 'lanna'", in Panphen Khreuthai (ed.), *Wannakam phuthasasana nai lanna*, Social Research Institute, Chiang Mai University, Chiang Mai, 2540 [1997], pp. 51-60参照。関係する Khün 文化については Anatole-Roger Peltier, *La littérature Tai Khoeum/Tai Khoeum Literature*, École française d'Extrême-Orient & Social Research Institute, Chiang Mai, 1987参照。

115　*A Critical Study*, Introduciton, p. 25に基づくリスト。Dr. Balee Buddharaksa, Chiang Mai のご厚意による付加的情報を加えた。

116　*A Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*, Chiang Mai, 2541, 1150 pp.

117　その「ルアン・プラバン」写本自体は、以下に示すヴィエンチャンで出版された仏教学研究所のエディションに基づく Niyada の50ジャータカのリストに類似したものであるが、完全に同一ではない。

118　Table II 参照。

119　詳しくは *A Critical Study*, Introduction, p. 29参照（そこには「24」という数字が見えるが25話をリストアップしている。

120　詳しくは *A Critical Study*, Introduction, p. 29参照。

121　*A Crtitical Study*, Introduction, pp. 29-31; Table 1のようにローマナイズした。

122　"Thai Yuan"というのは、「北タイ」(*kham muang, phasa lanna*) に対するいくつかの名称のうちの一つである。

123　Niyada, *Paññāsa Jātaka*, pp. 57-58参照。私はその物語は、Tai Khün という地方語で書かれていたものと推測する。

124　*Saranukrom watthanatham thai phak isan*, Vol. 4 (Bangkok, 2542[1999]), pp. 1678-1682, 1684-1686, 1687-1694.

125　*Saranukrom watthanatham thai phak isan*, Vol. 14 (Bangkok, 2542[1999]), pp. 4762-4771.

126　この論文のコピーの入手に関し、Madame Jacqueline Filliozat に謝意を表します。[同論文は Ecole française d'Extrême-Orient, Chiang Mai-Paris-Vientiane より公刊される予定である。]

127　*Phra Chao Ha Hip Chat* のうち、どれだけの巻が出版されたのか私にはっきりしていない。Niyada (*Paññāsa Jātaka: Its Genesis and Significance*, p. 58, n. 1)は、2つの巻が2517[1974]に出版されたと記している。幸運なことに第一巻に50話すべてのリストがある。オリジナルは筆者未見であり Niyada, pp. 58-63に挙げられているリストに言及することとする。[含まれる物語の]不一致は、実質的なものというよりも、単にタイトルの違いによって生じた見かけ上のものであるかもしれないので、すべての物語が利用できるようになるまでは、正確な対応表は作成できない。たとえ集成が内容において同一であったとしても、それは物語の伝承が同一であるということを意味しない。Wat Sung Men と *Phra Chao Ha Sip Chat* とに共通する物語の順序は同一であり、最大9つのタイトルが異なっている。あるリスト(何が元になったかは明記されていない)が P. V. Bapat によって"Buddhist Studies in Recent Times", in P. V. Bapat (ed.), *2500 Years of Buddhism*, Delhi (1956: repr. 1959), "Laos", pp. 431-432に挙げられているが、タイトルの差異(地方語とパーリ語の違いなど)を考慮に入れれば、仏教学研究所版と同じものであるように見える。Fickle, *An Historical and Structural Study*, p. 18. Table III は「ラオスの集成における」50のタイトルのリストを提示する。

128　[Institute for Buddhist Studies という]研究所の名称に対する英訳は仮のものであることを付記しておく。公式な英語名を見つけることはできなかった。[この翻訳においては「仏教学研究所」という名称を使っておく。]

129　Henri Deydier, *Introduction à la connaissance du Laos*, Saigon, 1952, p. 29. この記述はもちろん、Wat Sung Men 写本に照らして修正されるべきではある。

130　Niyada, *Paññāsa Jātaka*, pp. 58-59.

131　Jacqueline Filliozat による Deydier の近刊論文に対する序文 (p. 3)。

132　人気の高い物語の一つについては、Thao Nhouy Abhaya, "Sin Xay", *France-Asie: Revue mensuelle de culture et de synthūse franco-asiatique*, 118-119 (Mars-Avril 1956), Numéro spécial, Présence du Royaume Lao, pp. 1028-42参照。

133　Fickle, *An Historical and Structural Study*, Table II, p. 17参照。

134　彼女の結論は次のようである："Notons que les manuscrits de la Bibliothèque national de Paris, aussi bien que la traduction siamoise présentée par le prince Damrong, montrent l'identité des versions conservées au Siam et au Cambodge, par opposition à celle du Jaṅ: may [Chiang Mai] paṇṇāsa que nous ne connaissons,

jusqu'à présent, que par l'exemplaire de Rangoun" ("Samuddaghosajātaka", p. 254).

135 Fonds pour l'édition des manuscrits du Cambodge, Inventaire des manuscrits khmers, pāli et thai de la Bibliothèque Nationale de Phnom Penh, École française d'Extrême-Orient, 1999, p.6, Cat. No. B 36.

136 *Ganthamālā*, Publications de l'école supérieure de pāli éditées par les soins de l'Institut Bouddhique X, *Paññāsajātaka*, Texte pālī, Phnom-Penh, Éditions de l'Institut Bouddhique, 1953-62.このセットは非常に入手困難である。私はこれを東京の国際仏教学大学院図書館において2000年11月に見ることができた。(Tome 1のフランス語のタイトルページには、"Deuxième Édition"と記してある。初版は筆者未見である。)

137 筆者未見：Jacobs による bibliography（下記注138)、p.209参照。

138 Nhok Thèm, *Paññāsajātaka saṅkhep*, Phnom Penh, 1963, 556 pp. この本の存在を知らせてくれ、コピーを提供してくれた Olivier de Bernon に謝意を表します。M. de Bernon は、"cet ouvrage a fait l'objet d'une réédition, assez fautive, en deux volumes à Phnom Penh en 1999"（2000年12月の私信）と注記している。(Jacobs の包括的な bibliography, p. 252には、Nhok-Thaem という綴りの下に、この本も言及されている。)

139 Niyada (*Paññāsa Jātaka*, pp. 63-69) of *Paññāsajātak samrāy* の Fascicle 1の序文に基づいて、リストを提示している。最初の35話は *Paññāsajātak saṅkhep* と内容と順序においておおむね一致しているが、それ以後は異なっている。

140 Auguste Pavie, *Contes du Cambodge*, Repr. Éditions Sudestasie, Paris, 1988. [高垣謹之助訳『柬甫塞（カンボヂヤ）物語』中公文庫（1993年再刊）はこの書（1921年刊）からの重訳と思われる。]

141 Judith Jacobs, *The Traditional Literature of Cambodia: A Preliminary Guide*, Oxford University Press, Oxford, 1996. Paññāsa-jātaka についての言及については、pp. 37 foll.および pp. 50-51参照。

142 セクションごとに分割しないタイトルのリストは、Fickle によって Table IV に挙げられている。彼女の論文は、Pali Text Society によるパーリ語の *Zimmē Paṇṇāsa* とその英訳の出版以前に書かれたものである。Fickle によって挙げられているタイトルは、Finot("Recherches", p. 45)と Terral ("Samuddaghosajātaka", p. 341)および、PTS 版が基づいたのと同じ、それら以外の二つのソースに基づくものであるが、No. 13だけは例外である。彼女のソースは Hanthawaddy Press の1911のエディションに基づくものであるのだから、このことは驚くにはあたらない。No. 13は *Suvaṇṇakumāra* と *Dasapañhavisajjana* という２つのタイトルを持つのである。

143 ダムロン王子によって詳述され、ジャイニによって繰り返された物語は、ビルマの王がこの作品を偽経であると考え、すべての写しを消却させた、というものである。U Bo Kay は、これを Niyada に対する手紙（*Paññāsa Jātaka*, p. 36, n. 1）において強く否定している。

144　その写本はおそらく、Charles Duroiselle が Bernard Free Library, Rangoon のために購入したものであろう。Duroiselle から Louis Finot に宛てた1917年6月6日、マンダレーの日付のある手紙には、彼がフィノーに送った"un volume du Zimmè Paṇṇāsa"に対する言及がある。Duroiselle は"ce volume fut imprimé sur la copie en feuilles de palmier que j'ai réussi à acheter pour la Bernard Free Library après plusieurs années de recherches. C'est la seule copie qui me soit connue en Birmanie."と述べている。(この手紙は Jacqueline Filliozat による Deydier の近刊論文に対する序文の注4に引用されている。)

145　Padmanabh S. Jaini (ed.), *Paññāsa-jātaka or Zimmè Paṇṇāsa* (*in the Burmese Recension*): Vol. I, Jātakas 1-25, London, 1981 (Pāli Text Society, Text Series No. 172); Vol. II, Jātakas 26-50, London, 1983 (Pāli Text Society, Text Series No. 173). Jaini は、Vol. I (pp. v-vi)において1978という日付の予備的な注記を著している。そして Vesak　1981という日付の introduction は、パーリ語テキストの PTS 版の Vol. II (pp. xi-xliii)において、1983年に出版されている。Jaini は各物語を要約し、パラレル文献や、源泉の可能性があるものに言及し、集成全体の「場所、年代、著者」と「言語学的特徴」について論じている。

146　I.B. Horner & Padmanabh S. Jaini (tr.), *Apocryphal Birth-Stories* (*Paññāsa-jātaka*), Vol. I, London, 1982, xiii+316 pp. (stories 1-25); Padmanabh S. Jaini (tr.), Vol. II, London, 1986, 257 pp. (stories 26-50).

147　*Chiang Mai Paññāsajātaka*, 2 vols., Fine Arts Department, Bangkok, 2540[1997], 698 pp. (Vol. I, stories 1-25, pp. 1-378; Vol. II, stories 26-50, pp. 379-698).

148　*Piṭakat samuiṅ*, § 369 *jaṅ: maypaṇṇāsajāt*; § 898 *jaṅ: maypaṇṇāsajāt nissaya*. *Piṭakat samuiṅ* については、Oskar von Hinüber, *Handbook of Pāli Literature*, p. 3および U Thaw Kaung, "Bibliographies compiled in Myanmar", in Pierre Pichard & François Robinne (ed.), *Études birmanes en hommage à Denise Bernot*, École française d'Extrême-Orient, Études thématiques 9, Paris, 1998, pp. 405-406参照。関係箇所を要約してくれた Peter Nyunt 並びに、Sunait Chutindaranon 博士のコメントに対し、謝意を表します。

149　D. G. E. Hall, *A History of South-East Asia*, Fourth Edition, Macmillan, Houndmills & London, 1981 (repr. 1985), p. 625.

150　*Piṭakat samuiṅ* の近年の刊本の目次は、通称を用いており、根本テキストを "Chiang Mai *Paṇṇāsa-jātaka*" と呼び、その *Nissaya* は "Chiang Mai *Paṇṇāsa-jātaka-nissaya*" と呼んでいる。

151　その話に対する U Bo Kay の反応については、上掲注143参照。

152　最初の二つに関しては、jaini, *Paññāsa-jātaka or Zimmè Paṇṇāsa*, Vol. II, Introduction, p. xli 参照。最後のものに関しては Fickle, *An Historical and Structural Study*, pp. 63-137および、Fickle pp. 49-54と Table VIII 参照。

153 Udom Nuthong, *Saranukrom watthanatham phak tai pho so 2529*, Vol. 8, p. 3296 所収。

154 Fickle, *An Historical and Structural Study*, pp. 8-9.

155 これらの言及は、Niyada, *Paññāsa Jātaka*, pp. 42-43に示されている。

156 Niyada, *Paññāsa Jātaka*, pp. 36-37.

157 *Tamnan pun muang chiang mai chabap chiang mai* 700 *pi*, Chiang Mai, 2538, pp. 26-27; David K. Wyatt & Aroonrut Wichienkeeo (tr.), *The Chiang Mai Chronicle*, Silkworm Books, Chiang Mai, 1995, pp. 34-35; Camille Notton, *Annales du Siam*, Vol. III, *Chronique de Xieng Mai*, Librairie orientaliste Paul Geuthner, Paris, 1932, p. 46.

158 Phraya Prachakichakornchak, *Phongsawadan Yonok* [*Baṁśāvatāra yonaka*] *chabap Ho samut heng chat*, repr. Khlang vitthaya, Bangkok, 2516[1973], pp. 260-261. この言及はPeter Koretの未出版の博士論文 *Whispered So Softly It Resounds Through the Forest, Spoken So Loudly It Can Hardly Be Heard: The Art of Parallelism in Traditional Lao Literature*, Thesis submitted for the Degree of Doctor of Philosophy, University of London, 1994, p. 25, n. 94を通して、Anatole Roger Peltier, *Le roman classique lao*, Paris, PÉFEO, 1988, p. 29に基づくものである。

159 Fickle, *An Historical and Structural Study*, p. 8; Niyada, *Paññāsa Jātaka*, pp. 37-38.

160 Niyada, *Paññāsa Jātaka*, p. 36, referring to U San Tun.

161 Niyada, Lausoonthorn, "Paññāsa Jātaka,: A Historical Study", *in Binicvarṇakarṛm* (*Collections of Academic Essays Based on Manuscripts*), Bangkok, 2535[1992], pp. 172-180（タイ語）.

162 これらのタイトルに関してはSuphapan, op. cit., Niyada, *Paññāsa Jātaka, and A Critical Study of Northern Thai Version*, Introduction, p. 21参照。

163 *A Critical Study of Northern Thai Version*, Introduction, p. 22.［ただし、田辺和子「タイに伝わる『パンニャーサ・ジャータカ』（50ジャータカ）」『仏教学』11, 1981, pp. 69-70によれば、写本Eに伝わる集成の中に収録されており、これは50話よりなるパンニャーサジャータカの第45話に相当すると推定されている。］

164 特にTerral, "Samuddhaghosajātaka"（*Bulletin de l'École Française d'Etrême-Orient* XLVIII, 1, 1956）参照。これはいくつかのテキストと比較している。

165 内容のリストについてはGeorge Coedès, "Dhammakāya", *Adyar Library Bulletin* XX. 3-4, p. 252, n. 2参照。

166 Udom Rungreungsri, "Wannakam chadok ti milaksana pen "lanna'", pp. 51-52.

167 Eveline Porée-Maspero, "Le cycle des douze animaux dans la vie des Cambodgiens", *Bulletin d'École française d'Extrême-Orient* L. 2 (1962), pp. 316, 331.

168 Wajuppa Tossa, *Phya Khankhaak, The Toad King*: A Translation of an Isan

Fertility Myth into English Verse, Bucknell University Press, Lewisburg, 1996, p. 134.

169　Peter Koret の2001年２月の口頭教示による。

170　Tablese I および II を準備してくれた Santi Pakdeekham に謝意を表します。これらは*Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*, Introduction, pp. 29-31に基づくものである。“occasions”の項目について正しいかどうかをチェックすることはできなかった。

171　*Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*, Chiang Mai, 2541, Introduction, p. 29のリストである。

172　Table III および IV を準備してくれた Olivier de Bernon に謝意を表します。